

42262

教科書文庫

4
810
42-1929
20000
26460

29.17

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

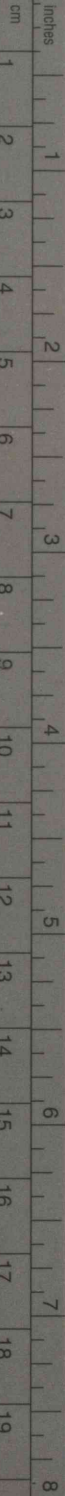


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Shil4
資料室

撰新
女子國文



卷四



日二十二月二年四和昭
濟定檢省部文
用科部國校學女部高

資料室

375.9

shila

文學博士新村出編

新撰
女子國文

京都 永澤金港堂發兌



筆業廣崎寺

(九) 聲の蟲

廣島大学
蔵書
印



新撰 女子國文 卷四 目次

一	明治神宮	高野辰之	一
二	ウイルヘルムテル	松村武雄	六
三	紐育の中央公園	厨川白村	六
四	飛驒の高山(自習文)	江馬修	三
五	南國の果物	鶴泉祐輔	三
六	富籤	矢田挿雲	三
七	現代詩大觀(その三)	柳澤健	三
		室生犀星	三
		與謝野晶子	三

目次

一

八	能因法師……………	上	司小劔……………	四
九	蟲の聲(自習文)……………	沼	波武夫……………	四
一〇	芭蕉翁と良寛和尚……………	瀧	馬御風……………	五
			(砂上漫筆)	
一一	棧道(その二)……………	久	米正雄……………	五
			(木靴)	
一二	棧道(その二)……………	久	米正雄……………	六
			(木靴)	
一三	現代和歌大観(その二)……………			九
一四	大統領の謁見(自習文)……………	巖	谷小波……………	一〇
			(新洋行土産)	
一五	西湖の月……………	谷	崎潤一郎……………	一〇五
			(西湖の月)	
一六	霧……………	長	田幹彦……………	一三
一七	渡鳥……………	吉	江喬松……………	一七
			(若き自然)	

一八	母と蘆(自習文)……………	西	條八十……………	二四
			(詩の味ひ方)	
一九	精進勇猛(その一)……………	菊	地寛……………	三〇
			(恩讐の彼方に)	
二〇	精進勇猛(その二)……………	菊	地寛……………	三三
			(恩讐の彼方に)	
二一	冬枯の大井川……………	千	葉龜雄……………	四五
二二	現代詩大観(その四)……………	野	口雨情……………	六〇
		河	井露茗……………	
二三	讀書の選擇……………	三	木露風……………	六〇
		佐	々醒雪……………	六六
二四	戦争と天氣……………	藤	原咲平……………	七二
			(雲を攔む話)	
二五	現代俳句大観(その二)……………			七九

新撰 女子國文 卷四 目次終



新撰 女子國文 卷四

一 明治神宮

高野辰之
文學博士。歌
謠學者。



高野辰之肖像

至聖至仁、明治天皇の登遐あらせ給ふや、國民の悲痛は譬
ふるにもものなかりしが、悲痛はやがて
追慕となり、追慕は神宮奉建の請願と
なりて、遂に東京の西郊代々木の御料
地に明治神宮の創建を見るに至れり。
代々木の御料地は東京に近き處にて
は、最も廣濶幽邃の地なり。林泉の美自ら備り、市街に接す

高野辰之

れども、よく塵寰を隔つ。明治天皇嘗て此所に行幸あらせ

給ひ昭憲皇太后は殊にめでさせ給ひて、屢行啓あらせられき。

大正四年議成りて、神宮奉建のこ

明と公表せらる、や、獻金、獻木を願ひ出づる者多く、全国各地の青年團は、

労働奉仕の爲に相次いで此所に參集せり。かくて工事は着々進捗して、大正九年略工を竣へ、同年十一月一日を以て鎮座祭、同三日を以て例祭舉行あり。此の間帝都是美しき幔幕と、國旗と、提灯と奉祝門と、電飾



燈と、空前の装をなして奉祝の誠意を表し、各地より來りて參拜する者亦幾十萬人の多きに達せり。

神宮の靈域は内苑と外苑とに分たる。外苑は世にいふ青山練兵場にして、内苑は即ち代々木の御料地なり。社殿は内苑の中央、老松の亭々として聳ゆる處にあり。圍三匝、第一匝は透塀にして、御本殿、神庫等此の中にあり。第二匝は廻廊にして、内外兩院より成り、兩院の合する處に拜殿あり、外院の南には宏麗の樓門、南神門あり。第三匝は玉垣にして、四方に鳥居各一基あり。社殿、神門等悉く、檜皮葺の素木造にして、一切檜材を用ひ、何の彫刻もなく、色彩もなく、莊重森嚴を極む。

參道三つあり。青山六丁目より入るを南參道といひ、外

苑よりするを北參道といひ、代々木より入るを西參道といふ。南北參道の合する處に大鳥居あり、進みて右すれば、すなはち正面なる南神門に達す。

大鳥居を入りて南に一帶の樹林を見る。これ舊苑にして、苑内には隔雲亭と稱する御茶屋あり、又池あり、芝あり、泉あり、菖蒲田あり、これと接して、檜櫟などの雜木林あり。技巧は自然の中に隠れて風趣いふべからず。

内苑は一大林苑となすの計劃にして、社殿の周圍には、松に檜、椎、楠等を交へて密林となし、社殿を遠ざかるに隨ひて、



御苑菖蒲田

落葉樹・闊葉樹を加へてやうやく粗林となせり。

各地よりの獻木十二萬年々枝さしそひて緑の色を加へなば、幽邃無比の鬱林となるも蓋し遠きにあらざるべし。

大正十年歌御會始に「社頭曉」と勅題ありて、今上陛下は、

とりが音に夜はほのくと明けそめて

代々木の宮の森ぞ見え行く

と詠ませ給ひ、臣民より詠進せる歌、又代々木の神宮を詠じたるもの多かりきと承る。これ皆不世出の英主明治大帝の御遺徳を仰ぐの致す所なり。大正十二年の春就きて社人に問へば、參拜する者年々に多く、當今日々一萬二三千人に上り、諸外國の人も眞に敬仰の誠意を表して拜すといへり。(女子國文讀本)

松村武雄
傳説學者、文
學博士。東京
帝國大學講師。

ハプスブルヒ
瑞西の舊
貴族、
獨逸帝室
の祖とな
る。
Albert. アルベルト
奥地利の
公爵ドイ
ツの皇帝
(1248—1308)
Gessler. ゲスレル

二 ウイルヘルムリテル

松村武雄

西曆一千三百七年、瑞西の民はをかしくもまた苦しい經
験を嘗めさせられた。

ハプスブルヒのアルベルト帝の代官に、ゲスレルといふ
ものがあつた。上の威光を笠カサに着て、
さまさまのことを企企てては罪つとめもない
民を苦しめた。
或時ゲスレルは、人の往き來の多い
場所を見計らつて、小高い丘に一本の
柱を建てて、其の上に帽子を載せた。さうして嚴しく領内



松村武雄肖像

の民に命じていふやう、何人にもあれ、此の路を通るものは、
恭しく膝を屈げ頭を垂れて、帽子に敬意を拂はねばならぬ。
柱にかゝる帽子こそ、忝くも代官の姿と思へ。萬一にも命
に背くものがあれば、命を斷ち家を没なげするぞといふ。といふ。
領内の民は、代官のお觸を聞いて、心の中ではをかしくも
ばかしくも思つたけれども、虎の威を借る狐のやうな
ゲスレルは、我意アノコトに募あつり、横紙破ヨコカミヤクりて名の高い代官である。
人々は濫ヤトカク々と帽子の前に頭を下げて通る。代官の仰を受
けて帽子の番をしてゐる役人共は、驚のやうな眼付をして、
路を過ぐる人々を監視してゐる。さうして帽子に禮をす
るものを、傲然と高い處から見下しながら、顔には嘲の色を
浮べてゐる。

やがて山住みの男が通り掛つた。屈竟な體を眞直に伸ばして、大跨にゆるくと歩いて来る。彼の眼はひたと柱の上の帽子に向つてゐる。けれども、彼の心には帽子も役人もないのか、何處を風が吹くといはんばかりの顔つきである。役人共は憎い奴と睨みつけながら、其の男の近づくのを待つてゐる。すはといはば飛懸らんずる氣勢である。それを知つてか知らないでか、男はじろりと役人共の顔に一瞥をくれたまゝ、帽子には頭を下げないで、のこくと通り過ぎようとする。こらへかねて役人どもは一齊に呼止める。

「上意。止れ。」

横柄な調子である。男は立止つた。さうしてはつきり

した聲でいふ。

「何、上意と申されるか。一體何で私をお止めなさる。」

「お上の掟を存ぜぬか。早く此方に來て帽子にお辭儀をしろ。」

「何で帽子にお辭儀をするのでござるか。」

「黙れ、此の帽子は忝くも代官様の御體と同様ぢや。」

役人どもの嚴しい顔つきも横柄な音調調も、此の男の胸には何の恐も起さぬと見えて、飽くまで落着き拂つてゐた。

「私はどうしても帽子に頭を下げるのは厭でござる。」

役人どもはさながら自分の身を嘲られたやうに怒つた。

「此奴横着な。畏れ多くも代官様を輕んずる。さあ、早くお辭儀をしろ。」

Wilhelm Tell. ウィルヘルムテル

けれども、男はどうしても頭を下げようともせぬ。こらへかねて役人どもは彼に繩を掛けた。さうして代官の前に引出した。此の男は誰であらうか。即ちウィルヘルムテル其の人である。

テルは代官の前に引出されても、悪びれた氣色もない。代官は眼を怒らしてテルを睨んだ。一轍に我意を募らしても、蟲のやうにおとなしく頭を下げてゐた人々の中に、かやうな骨の硬い男を見出したのは意外である。けれども、たゞ意外とばかりでは濟まされぬのは、代官の腹の裡である。己が威光を蔑にした男、己が命令を反古にした無禮者と思ふと、堪へきれぬ怒氣がむら／＼と心頭にのぼる。代官は高い處からテルを憎さげに見下しながら、どんな罰を

加へようかと考へた。

奸智に長けた代官は、正面からテルを罰することを避けて、後に廻つてじり／＼と苦しめようと思つた。やがて好い思案が浮んだのか、急に顔色を和げていふ。

「こりや、テルとやらいふ男、其の方弓の名人といふことぢやが、誰にも後れは取るまいな。」

深い巧みのあるとも知らぬテルは、きつぱりと答へた。

「仰の通りでござりまする。」

「よし、それぢや、此の方所望がある。」

敵を思ふ壺に陥れた快さに微笑みながら、代官はいふ。「其の方の子供の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せ。所望ぢや。さあ、用意をせい。見事林檎

百歩を隔てて
云々
支那の楚の養
由基の故事。



楡林の上頭

が射落せたら、今日の無禮は赦して遣はす。若し少しでも誤つたら、其の方の首はないものと思ふがい。」

テルは心の中に「しまった。」と叫んだ。百歩を隔てて柳の葉を射る腕に覚えはある。けれども、代官が射よと望むのは、我が子の頭の林檎である。柳の葉を射るには胸が騒がぬ。いとしい子供の頭を掠めて矢を放つに、無心でゐられようか。萬が一にも思ふ矢壺をちよつと下に外したら、我が子の命はないものと極つてゐる。テルの胸は千々に亂れて暫くは何の返答も

せぬ。

代官は氣をいらつて、上座から「どうぢや。」といふ。今はのがれぬところと、テルはきつと代官の顔をにらんで「承知致しました。」と答へた。

と、やがてテルの子が呼出された。嚴かな一座の氣勢の何となくなつた。ならぬに、幼き心のさすがに動いて見えた。テルは暫く我が子の顔を見守つてゐた。が、やがて思ひ入つた口調で、

「どうぢや、殿の仰には、其の方の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せとの仰ぢや。其の方は林檎を載せて矢面に立つ氣か。」といふ。

子供ははつと驚いた。頭から冷たい水を浴びせられたやうな心地である。けれども、彼は健氣にも氣を取直して、「お父様の爲とあれば、矢面に立ちませう。」といふ。

一座の者は覺えず涙ぐんで、代官の顔を見る。代官は眉毛すら動かすことなく、傲然と構へてゐる。

子供は頭に林檎を載せて庭に立つた。數十間を此方に離れて、テルが二本の矢を持つてきつと身を構へる。代官の左右に流るゝ人々は、固唾を呑んで控へてゐる。テルは弓に矢を番へながら大きな聲で、

「眼を塞いでゐる。矢が恐くて頭を動かしたら一大事ぢや。」といふ。親の子とて、子供もさすがに膽が太い。彼は

平然として、

「恐しくはありません。」

といひながら、涼しい眼を睜つて、父の様子を窺つてゐる。テルは満月の如く弓を引絞つて切つて放す。途端に彼は覺えず眼を閉ぢた。我が放つた矢の行方を氣遣つたからである。矢は流るゝ星のやうに空を斬つて、發矢と林檎を貫く。林檎は小さい音を立てて大地に落ちた。

一座の者は思はず手を叩いてテルを讚へた。代官は案に相違の面貌に、苦い笑を浮べてゐる。と、ふと一本の矢がテルの手に残つてゐるのに氣がついて、

「手に残る矢は何の爲ぢや。」と尋ねた。すると、テルは昂然と空に嘯きながら、

「何の爲でもござりませぬ。林檎を射損じた折殿の胸を射抜く覺悟で……。」
といひ捨てて、呆氣に取られる代官を後に、悠々と立去つた。

オーストリアの傳説

厨川白村
名は辰夫。京
都の人。文學
家。大正十二
年九月歿す。
年四十四。

三 紐育の中央公園

厨川白村

何でも調子外れに大きなことの好きな米國で、また最も大きな都會は、五百萬の人間が一かたまりになつて大きなことばかり考へてゐる紐育である。小さい日本の中で最も可愛らしい京都といふ都からこゝへ來ると、大いに度膽を抜かれた恰好である。そこで大きい物に出くはしたら、



厨川白村肖像

何でもせゝら笑つてくれようと、私は豫てから十分覺悟をして行つた。幸ひにして何を見てもせゝら笑つてやることができた。決して驚きはしなかつた。が、こゝに一つ私をして驚くどころか、頗る閉口せしめた上、これでもかといつて、とう／＼私を降参させてしまつたものがある。
去年の二月の初、紐育へ着いてから三日目か四日目の午前であつた。一つ博物館を見に行かうと思つて、まだ土地の勝手も全くわからないのに、大吹雪の中を一人で宿を飛出した。博物館は公園の東通第五街にある。ところが、私がひとかど心得顔に乗つた電車は、其の方へは行かずに途中から曲つて公

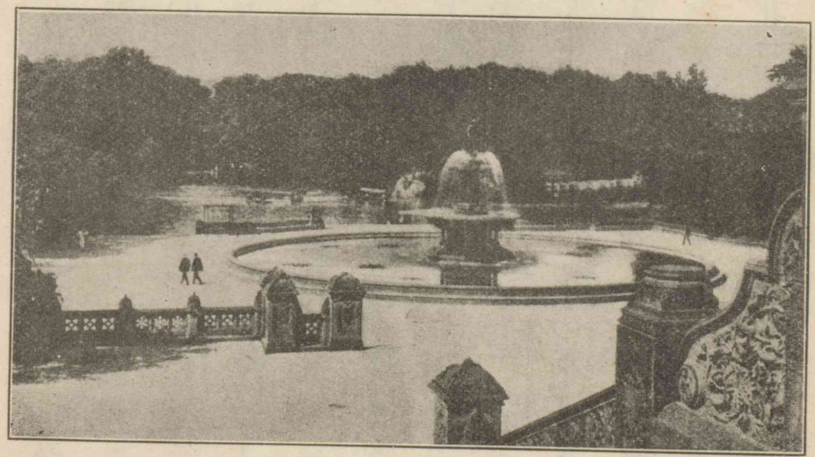
園の西通へ出た。仕方が無いから、博物館の見當にあたる八十丁目あたりで私は下りた。なかに公園のことだから、此の邊を眞直に通り返けて東の方へ三四町も歩けば、博物館に到着疑なしと獨合點したのが抑の誤り。大雪の降りしきる中に、人通りはおろか犬ころ一匹ゐない處を痛い足を引きずつて、行けども、博物館らしいものは見當らぬ。やがて小山のやうな處へ上つて見ると、そこには馬鹿馬鹿しい大きな池がある。何でも紐育全市に水を供給する貯水池はこれであるらしい。寒さと疲労で弱り果てた私は、今更あとへ引返すこともならず、さりとて肝腎の博物館はどこにあるのやら、影も形も見えない。尋ねようにも人はゐない。まるで西伯利亞の大荒原の眞中で行暮れた

やうな心細さであつた。痛む足をじつと撫でさすつて、漫たる池の水を獨り茫然として眺めた時ばかりは、此のとつともない大きな公園に對して、心から私は兜を脱いだ。仕方がないから、また十町あまりも足を引きずつて、やつとのこと博物館へ辿り着いた時は、もう氣息奄々として病める野良犬の如く、とても陳列品などを見る勇氣も何もなかつた。これは私が如何なる場合にでも、地圖や數字に不注意である天罰だといつて友人が笑つた。

此の大公園は其の名の示す如く、市の中央目抜の地にあつて、假にこれを私有地だとすれば、確に土一升金一升の地面、ちやうど東京の日本橋あたりか、大阪の船場のやうな位置にある。それを惜氣もなく南北二哩半、東西約一哩をし

Hudson
ハドソン河
米國東部の河口にあり、
ニューヨークの東部の河口にあり。

きつて公園とし、巨萬の財をこれに投じて、庭園藝術の極致を盡くし、ちやうど上野公園と日比谷公園を合したやうな設備をしたものである。其の餘りに廣大なる爲に、紐育土着の人ですら、屢、此の中で道に迷ふといふのは有名な話である。紐育の市にはハドソン河畔のリーサイドか、さもなくば餘程場末でもなければ、私人が獨占の庭園と目すべきものは、ハドソン河の畔にあり、尺寸の地ももない。そこで大



紐育の中央公園

Oasis
オアシス
砂漠の中の
茂つた木の
る沃地。

Hyde park
ハイドパーク
Kensington
Garden
ケンシントン
ガーデン

小無數の公園は、倫敦人が所謂市の「肺臓」ともなり、黄塵萬丈の地にオアシスともなつて、五百萬の市民に貴賤・貧富のわかちなき共同の恩恵を與へるのである。獨占主義の國に生れた私は、土一升金一升の町の眞中に、こんなだ、廣い大きい公園があらうとは夢にも思はなかつたのみか、閉口し降參させられたのであつた。

英京倫敦へ行つた人は、誰でもハイドパークの大きいのに呆れる。しかし其の面積は三百六十一エーカーで、これと隣したケンシントンガーデンを合しても、六百三十一エーカー即ち七十七萬八千五百坪、ちやうど東京日比谷公園の約十八倍である。ところが紐育の中央公園に至つては、八百七十九エーカーの地を占めて、英京の此の二大公園を

合したるよりも更に遙かに大きい。たしかに日本人の度
膽を抜くぬくに足るだけに大きい。(北米印象記)

四 飛驒の高山 (自習文)

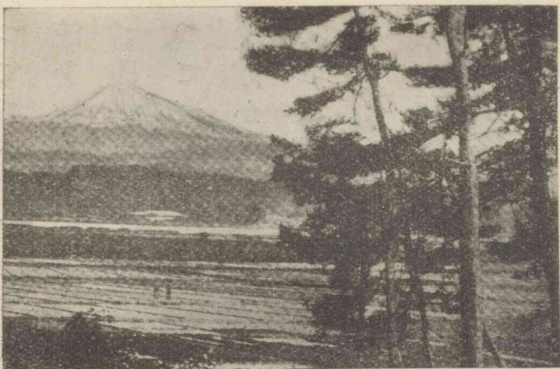
江馬修

江馬修
明治二十二年、
岐阜縣に生る。
小説家。



江馬修肖像

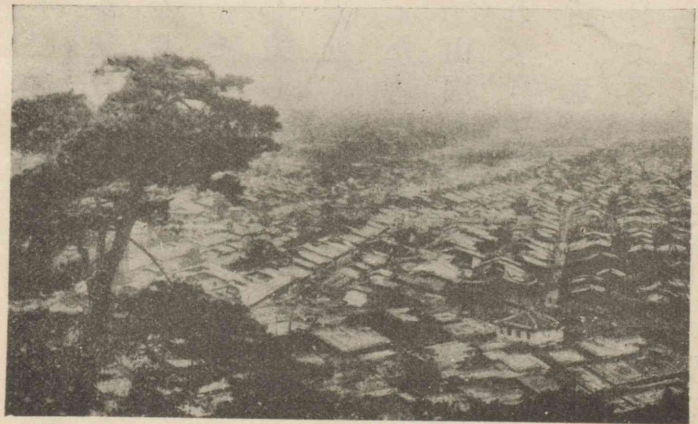
最近私は五年振で故郷へ歸つた。もつとも親戚に不幸があつた
ために、全く取るものも取りあへず大急ぎ
で歸つたのであるが、それにしても懐かし
い故郷ではあり、二三年前から一度歸らう
と願つてゐて、つい機會を得ずにもたやさ
きだつたので、悲しい中にも久しぶりで美
しい故郷を見、懐かしい身内の人々、叔母や兄などに會はれることを
楽しみにして歸つて行つた。



かういふ私の故郷は飛驒の高山であるが、こんど歸つて見て、今更
のやうに美しいところだと思つた。五年振とはいへ、これまでの歸
省はいつも夏か秋ばかりだつたので、新緑
の飛驒の高山を見るのは、實に二十年振だ
つたのである。そのためか、自分の故郷は
白
これまでになく美しく見えた。
殊にある夕方近く、高山を見下す高い城
山公園を散歩した時のことがなか／＼に
山
忘れられない。山國らしく空氣の澄みき
つた、明るい、はれ／＼とした五月の日で、輝
かしい太陽は遠く加賀の白山の上に、しづ
しづと傾きかけてゐた。さうして東の國
境に白々とつゞいた日本アルプスは、華やかな斜光を浴びて、幾重壘

見はるかす
遙かに見渡す
こと。

の山脈の彼方におごそかに静まり返つてゐた。眼の下は悠やかな宮川の流を挟んで、青々とした柳や数多い寺で目立つ古い板屋根の高山の町が、かつて汽車の煤煙に汚されたこともなく静かに横たはつてゐた。さうしてそれは城山の高みから見ても、深い深い山の奥に寂しく横たへられたものとして眺められるのである。文明の恩恵からは遠く、しかし自然の美には極めて豊富に充たされて。——さうしてこれらの風景を見はるかすつゝ、静かに城山を登つて行く僕のまはりには、



町山高た見りよ山城



亭白素園公山城

こんもりとした新緑の木立、若葉の間に美しくきらめく斜陽、鳥の囀、おゝ何といふ静けさ、明るさ、美しさ！ 私は本當に二三步行つてはうつとりとして立止つた。

正直なところ、私は自分の故郷をかくまで美しいとは思はなかつた。こんな美しさを感じるのは全くこれが始めてだつた。こゝで始めて地上の光を見さうして十八まではこゝだけに生活してゐながら、曾てこのやうな美を感じたことがなかつたのだ。勿論この美を解するには、今日の私が必要だつたのかも知れないが、それにしても、今日までそれに氣がつかなかつたかと思ふと寂しい氣がした。その晩、町の親切な若い人達が、私のために集つてくれた時、私はそ

のことを話した。さうして「君たちは自分がどんな美しいところに住んでゐるか知らないのです。確に君たちは想像以上に美しい恵まれた世界に住んでゐるのです。それに氣がつかないといふのは忘恩だ」といはずにゐられなかつた。二日一文

五 南國の果物

鶴見祐輔

鶴見祐輔
群馬縣の人。
雄辯家。文學者。

Mangostans
マンゴスチン
金絲桃科
の常綠喬木。
John.
ジョン

ホテルの一室に身を落ちつけて見ると、食事にはまだ間がある。町を少し見物して南洋の珍果マンゴスチンを買つて歸りたいと案内のジョンに命令した。

「委細承知」と馭者臺に飛乗つた。車は轆轤として陽光の下を走る。町の主な通り筋を過ぎて支那人街を北にしばらく行くと、古風な城門のほとりに着く。こゝが果物市で

Knife.
ナイフ



鶴見祐輔肖像

スチンと討死するほど食べて見たいと思つたからである。南洋の旅の引力Attractionの一つは、あの芳烈な熱帯果物の數でなくして何であらう。

だ三十分ほどあるといふ。到底待ちきれない。直ぐマンゴスチンの征伐にかゝる。濃い紫の色をした平たい柿ほどの大きさの外殻を、ナイフで淺く圓く輪切にして、すぼつとこの殻を開くと、殻の裏の鳩色の衣に包まれて、純白な梅

フォーク
肉叉

クリーム

cream.
乳脂。

アイスクリ
ム

ice cream.

の花弁のやうな六つの美しい實が顯れる。これをフォークの先でそつと引上げると、蜜柑の房のやうに抱合つた六つの白い房が、形そのまゝに出てくる。これを舌頭に置けば、春の淡雪のやうに須臾に融けていつて、たゞ馥郁たる芳香の全身をめぐつて漂ふのを覺える。その味はクリームに似て聊か酸味を帯び、林檎に似て更に甘く、アイスクリムよりも淡く、芳烈の香に至つては、到底何物もこれに比することが出来ない。思ふに、マンゴスチンは、造化がその巧みを凝らし、天下萬果の粹を抜いて、この一個の白肉中に凝結せしめたものであらう。

宜なるかな、旅して南國に至るもの、一人としてマンゴスチンの味を激賞せざるものなきこと。先年英國の某汽船

ポンド
英國貨幣
が名。我が
國の拾
圓に當る。

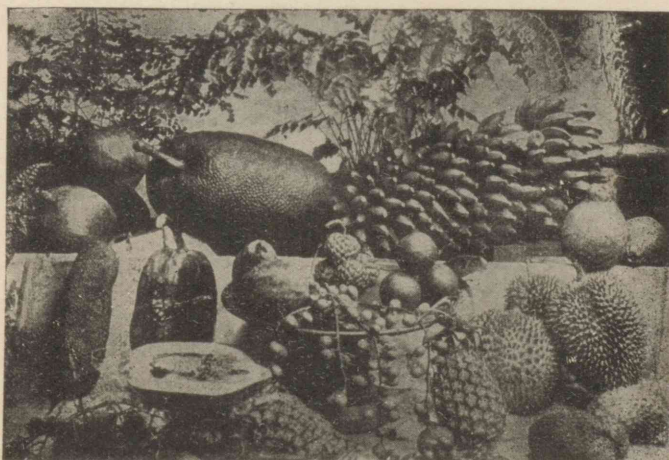
ジャバ
アシア
領東印
群島中
の度

會社で、その船長等に賞を懸けて、この一籠を英國の皇室に進めまゐらせたものあらば、これに三百ポンドを與へんといつたものがある。けれども今日まで一人の成功した者が無いさうである。蓋しこの果實は枝頭を離れて一週間ならぬに、早くも白肉塊は褐色に變じて自ら融解し去るからである。近時冷蔵庫に詰めて送ることをするが、やはりその眞の香と味とを失つてしまふ。しかもこの果實は、ジャバ近海以外の熱帯地には生じないのであつて、その特色は幾十個を味はふも決して胃腸を害せぬことである。歐米人の南洋旅行記は、殆どマンゴスチン讚美に埋まつてゐるといつてもよい。

食堂から歸つて來ると、えならぬ惡臭が紛々として鼻を

ベランダ
Veranda.
縁側又は
廊下。

ついて来る。何かと考へたが解らない。やがてベランダでかちりとナイフの音がする。初めて氣がついた。扉をあけて見ると、果然ジョンがしきりにドリアンの実を割つてゐる。見れば三間先の廊下で、ジャバ人のボーイがほしさうな顔をして立つてゐる。マンゴスチンが果物の女王と稱へられるなら、ドリアンは正に果物中の悪魔である。その腐卵の如き悪臭と栗のいがの如き憎々しい外皮とを以てして、



南國の果物

マライ
Malay.
アジアの
東南部の
半島。

しかもその人に迫る誘惑の鋭さ、到底想像の外である。大きさは甜瓜と西瓜の中間で、暗黄色を帯びた外皮は、樹皮のやうに固く、これに太い刺が金米糖のやうに生えてゐる。高さ三四十尺の枝頭に生じて、その下を通行する者の頭の上に墜ちると、往々大怪我をさせるといふので、土人は非常に恐れてゐる。ところがドリアンは決してもぎとつてはならぬもので、落ちた後に拾ふのも亦不可とされる。一は不熟で一は既に腐敗に瀕するからである。故にドリアンは好味を味ははうとする者は、その落ちるのを樹下に待つて拾ひ食ふべきである。マライの土人がドリアン樹下に踞して、その落下して来るのを待つ姿は、南洋に旅行するものがよく見る所である。ジャバ人の如きはドリアンの出

カスタード
西洋食品
の名。乳
卵糕。
Custard

盛りには、その甘味に飽くために、家産を賣拂つて顧みないものがあるといはれてゐる。こんな惡臭の果物の何處がよくて、かくも人々は夢中になるのであらうか。
今ジョンが割つたドリアンの実を見ると、ちやうど夏蜜柑の房の更に大きいやうな形で、どろ／＼と黄色いクリームはやうなものである。これをフォークで取上げて口に入れると、クリームを固めてバターを加へカスタードを加へたやうな味で、その濃厚にして美味なことは、マンゴスチンの淡泊上品とは全く正反對で、食へてゐると匂などは少しも氣にならない。マンゴスチンは耽溺する所なく、ドリアンは貪れば飽くことを知らない。ジャバ人中にドリアン中毒を起して、これなくば生きてゐられぬやうになる者が

あるといふのも、無理のないことだといふ感じがした。

六 富 籤

矢田捕雲

(南洋遊記)

矢田捕雲
明治十五年、
金澤市に生る。
文學者、俳人。
札差
官の米を拂ひ
受ける商人。
切米
扶持米を金錢
に切替へて渡
すこと。
天神
湯島天神。
一分
一兩の四分の
一。

文政五年十二月二十三日、小石川水道橋の輕士で、井上半次郎と云ふ者が、春の準備のため、淺草藏前の札差業板倉屋文右衛門方へ行き、御切米の賣上代金二兩を受取り、つまらなさうな顔をして、しを／＼と本郷湯島切通坂へ差掛つた。と、天神境内は、黒山の如き人ばかり。建札に、金千兩の富籤興行とあるのが見えた。半次郎は、むら／＼と射利心が兆した。二兩の内一分を捨てた積りで、札を一枚買はうかと思つたが、當らなければ元も子もなくなる。一分の金がふ

いになれば、夫婦三四日間の内職で埋合はせなければなら
ない。」と、半次郎は人波に揉まれながら
も、さすがに考へた。

其の頃の富籤と云ふものは、先づ興
行者側の世話人總代と、寺社奉行の家
來で、大檢役・小檢役と云ふ役人と、それ
に烏帽子・直垂を着けた天神様の神主
まで立會つて、臨時仕掛の棧敷の上へ
投票箱を擔ぎ出し、十分内部の番號札
をかき廻した上で、箱の一方に開いて
ある小さな孔から、長い採錐もみぎりを突つ込み、それで突當てた番
號札の持主に、千兩の賭金を與へると云ふ仕組。札は五千



湯 鳥 天 神

人分あるから、其の刹那まで緊張し切つた場内の貪慾氣分
が、次の瞬間には、一番札千兩、二番札百兩、以下十兩札數枚と、
都合十人の満足に、四千九百九十人の失望・嫉視・自暴自棄の
あさましく物凄い氣分に一變するのである。
半次郎は、思ひ切つて一枚買つて入札した。開票までに
は時間があるので、番號引換證を受取つて歸宅した。夕餉
の膳に向つて、一分失くするか、千兩取るか、俺も聲こゑに來て以
來、女房に着物一枚買つて遣らず、十五俵扶持の不足を、夫婦
が提燈張の手間賃で補つて行くとは情無いと鬱ふさいでゐる
所へ、表を「お話し」と言つて瓦版が飛んで行く。「お話しは、即
ち今日の號外である。早速買つて見ると、千兩の當り札は、
四千四百四十四番と、自分の番號が出てゐるのであつた。」

半次郎は逆上した。追取刀で湯島天神へ飛出さうとする袂を、女房お松がしかと捕へて事情を質すと、「富が當つたから、今年の正月は餅も澤山搗ける、鮭も味噌も澤山買入れ、其の方にも着物を買つて。」など、半次郎は、たわいのないことばかり言ふので、富籤と云ふものが、お松の腑に落ちるのは容易なことではなかつた。

しかしほゞ飲込みがつくや、お松はきつとなつた。「それでは十人程の人が喜ぶ裏には、四千九百餘人の歎があるのですね。十五俵でも、井上の家は、祖先以來御譜代の御家人、あなたも、小祿は御承知で養子に來られたのです。假令、此のまゝで一生終られても、恥づかしくはございませう。日頃から、『不義にして富み且貴きは浮雲の如し。』と口癖に

不義にして……
論語卷四、述
而篇にある語。

せられるお心掛に魔がさしましたか。連添うて今日まで五年が間、見上げた武士と敬うて來ましたけれど、只今の卑劣なお振舞には、愛想が盡きました。」と、引換證を見るも汚らはしい。」と、火鉢に投入れ、「それで御立腹なら、御手討に遊ばせ。」と言ひました。

半次郎は、器量のわるさ一通りでない。が、元來馬鹿でない男であるから、あゝ、面目次第もござらぬ。此の富籤には未練はござらぬでござる。」と、八角になつて詫びた。一方天神境内の興行場では、親籤の申出がないので、芋の子の煮えるやうな騒。此のこと瞬く間に公儀に知れ、翌年正月十七日の御用始に、半次郎は御小人目付を拜命し、後終に長崎奉行まで累進した。これが即ち井上備前守の前身である。

御小人目付
巡廻してわる
ものをしてら
る徒目付の下
に屬する役。

彼は晩年、徳川幕府の財政を司管する御勝手掛御勘定奉行として時めき、遂には三千石の大身となつた。

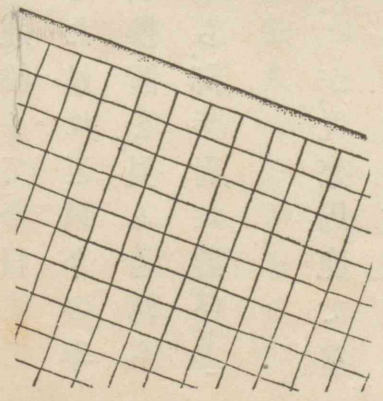
(江戸より東京へ)

七 現代詩大観 (その三)

テニス

柳澤 健

深き緑ともつる、微風と
躍れるものよ湧立つものよ
足には軽き白靴を手にはボールを
狙ひく、て彼の女の肩を
ボールは強く右手にひゞく



柳澤健
明治二十二年、
福島縣に生る。
詩人。

微風よ

軽快な足音を
さかめき立てよ
(さかめき立てよ)

白きラインと白靴と

緑の芝生風の舞

ボールは弾き一息に

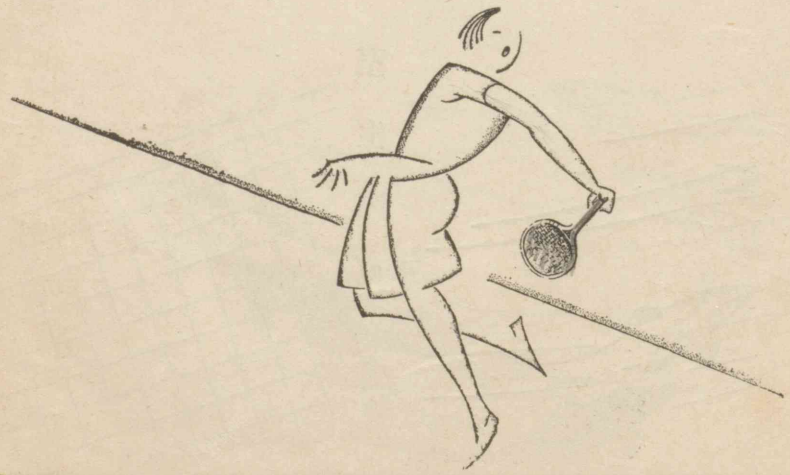
さゞめく風を切つて出づ

白きネットに燦爛と

陽は粉々の青と散る

五月の黄金に塗れたるボールは

跳る靴のそば



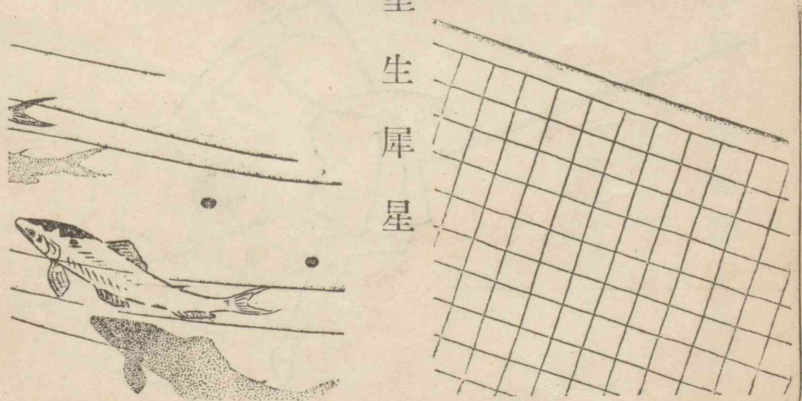
子供は叫ぶ柵の外
空には光る蝶の羽

深き緑ともつる、微風と
躍れるものよ湧立つものよ

鮎のかげ

脊なかにほくろのある鮎が
日のさす静かな瀬のうちに
泳ぎ澄んでゐる
幾列にもなつて
優しいからだを光らしてゐる
その影は白い砂地に

室生犀星

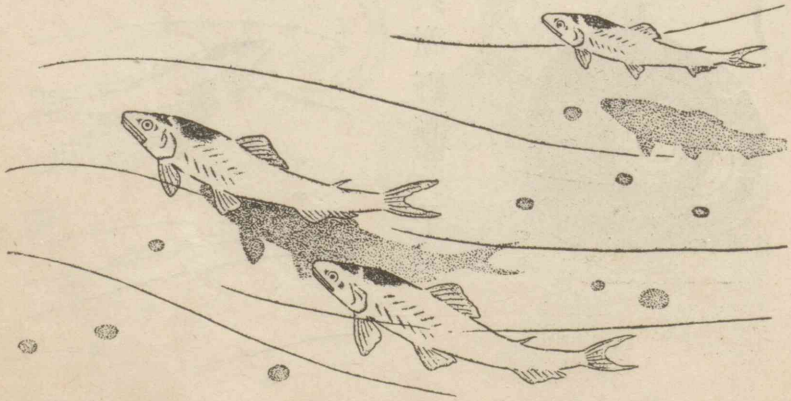


室生犀星
名は照直。明
治二十二年、
金澤市に生る。
詩人、小説家。

かげ繪のやうに
大きくなつたり小さく
なつたりして

時には暈けたりする
水のかげまで玉をつゞつて
砂底へ落ちてゆく

小さな物音にさへ
花の様に驚いては散つて
またあつまる鮎
すらりと群をぬいて大きな鮎が
とき／＼群をすべてゐるのが

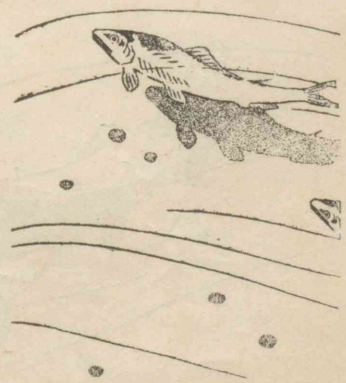


すこし瀨水瀬がしらへ出たり
ほこらしく高く泳いで水面へ
ぱちんとはねくりかへる
しんとした波紋なみずりがする
あとは土手の上の若葉の
匂においがするばかり

眞珠貝

眞珠の貝はつねに泣く
人こそ知らね大海は
風吹かぬ日も浪立てば
浪に揺られて貝の身の
ところさだめず伏しまろ轉ころび

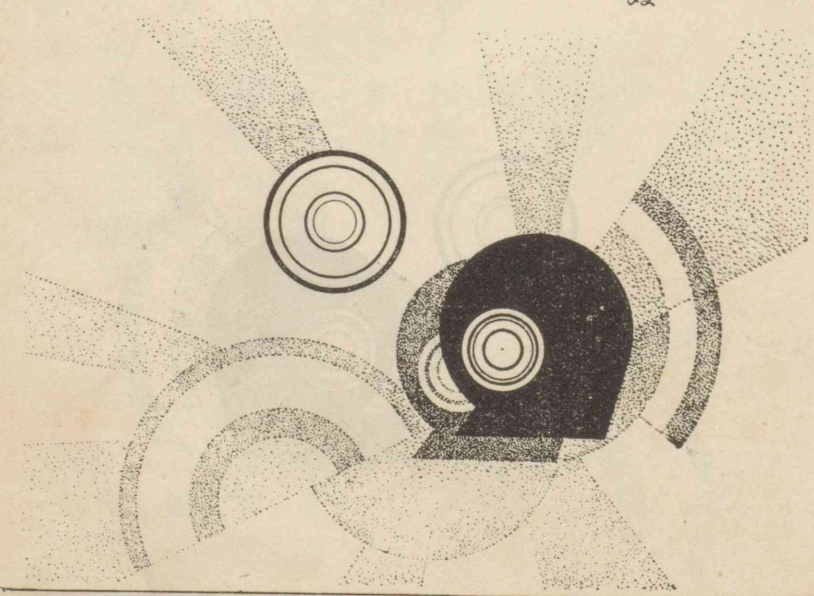
與謝野晶子



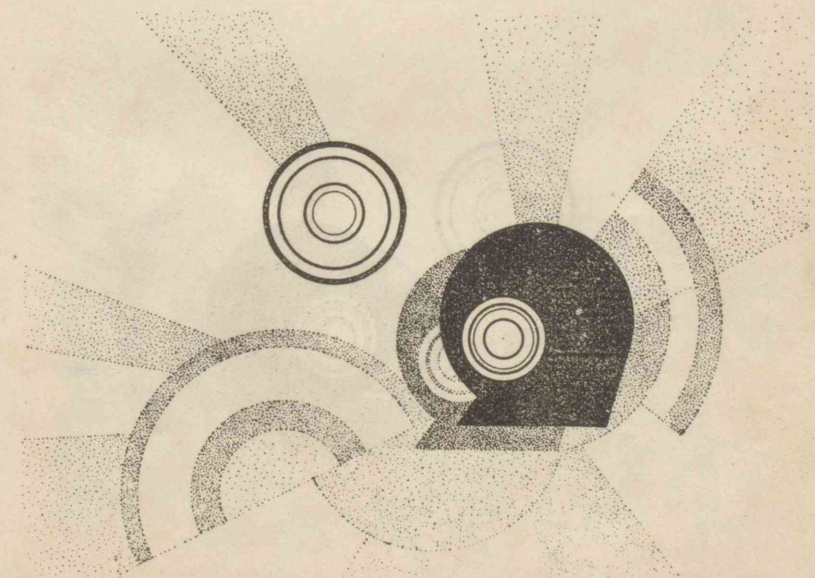
與謝野晶子
明治十一年、
大阪府に生る。
與謝野寛の妻。
歌人。評論家。

千尋の底に常に泣く

ましてたま／＼目に見えぬ
小さき砂の貝に入り
浪に揺らるゝたびごとに
敏くやさしき身を刺せば
避くる由なき苦しさに
貝は悶えて常に泣く
忍びて泣けど折々に
涙は身よりにじみ出で
貝に籠れる一點の



小さき砂をうるほせば
清く切なきその涙
はかなき砂を掩ひつゝ
日毎に玉とかはれども
貝はまろびて常に泣く
東に上るあけぼのは
その暖き薔薇色を
夜ゆく月は水色を
虹は不思議の虹彩を
共に空より投げかけて
玉は眞珠となりゆけど



上司小劍

名は延喜。明治七年、奈良市に生る。小説家。

能因法師

本名橘永愷。有名な歌人。

永承四年

後冷泉天皇の御代。

古曾部

大阪府三島郡磐手村の一字。

それとも知らず貝の身は
浪に揺られて常に泣く

八 能因法師

上司小劍

あらしふく三室の山のもみぢ葉は
龍田の川のにしきなりけり
永承四年内裏の歌合にかう詠んで一座の人を感心させ
た能因法師は、大得意で攝津の古曾部の里の庵へと歸つて
來た。よく詠んだものだと自分にも感心しつゞけて、都か
ら古曾部へ五里の道を疲れずに戻つて來たのだ。
あらし吹く三室の山のもみぢ葉は

龍田の川のにしきなりけり

さう幾度も能因は低く口吟んだ。庵へ辿り着いて、藁履をば寵愛の童子勸童丸に脱がせてゐる間にも、能因は今日の歌合に勝つた、あらしふくの歌をば、（秘）りかへし、（秘）微吟してゐた。いつになく都上りの供にはづれて、内心不平であつた勸童丸は、「うふ、うふ」と笑つて、能因の顔は見ずに、自分の穿いてゐる白と茜との染め分けの袴の菊總（ざき）を見詰めた。

「あらしふく……」と、能因がまたやり出すと、勸童丸はまた「うふ、うふ」と笑つた。稍暫くは「あらしふく……」と「うふ、うふ」との懸合であつた。

早い晩秋の日さしは、もう西の方能勢の山に落ちかゝつ

能勢の山
古曾部の西方
約三里にある

檜尾川
古曾部の東を
南に流れて淀
川に合する小
川。
蛙の干ぼし
帯刀藤原節信
といふ好事の
侍が、井手（山
城國綾喜郡）
の蛙の干ぼし
だとしてくれた
もの。

て、里の子守唄が暮を急ぐが如く、檜尾川の畔に聞えてゐる。足をすゝいで庵室に通つた能因は、いつもの通り、何よりも先に祕藏してゐる蛙の干ぼしになつたのを取出して見た。これは能因に取つて、何よりも大切な寶物で、庵の出入には必ずこれを掌に載せて、暫くは弄ぶのである。指先で弾けばこち／＼と音のする蛙の干ぼしの、まるで木彫のやうになつたのを、掌に載せて、「今戻つたぞよ。」とでも言つてゐるらしいほく／＼上機嫌の能因法師は、それをちやんとともにところへ納めると、夕餉までには少しある刻限を庭の眺に費してゐた。庭と言つても、たゞ芝生の上に飛石が、大きな龜が這ふ如くつゞいてゐるばかりである。

築地のさきは一面の田の面でもう刈入の期に入つた稻

の穂が重く垂れて、黄金の波をうたせてゐる。このあたりは山も低く野も浅くて、歌になるやうな眺は一つもないけれど、しかし能因は住馴れた庵とて、この平凡な景色をば、棄てがたくいつくしんでゐるのだつた。

生れつき小食の能因には、年老いても食ふのを樂しみといふわけには行かぬ。

彼の食事はたゞ小さな椀に盛つた飯一つで足りるので、其の一日の分量は鶏一羽飼ふほどにもあたらぬ。殊に彼は副食物と云ふものを少しも攝らない。彼は一碗の飯に豆の粉をふりかけて食ふ。それでいゝのだ。彼の食事はそれを樂しむのでなくて、生きてゐなければならぬ必要だけに食ふのだ。彼は自分の家での食事と同じやうに、他人

の家へ泊つた折の食事も一碗の飯だけで、副食物に山海の珍味が並んだとて、見向きさへしないで、ふところから用意の豆の粉を取出す。

能因の樂しみと言へば、たゞそれ一つを生命としてゐる和歌の創作ばかりだ。技巧派の彼は、己の住む古曾部の里の平凡な、さうして何等の歴史的背景のない自然から材料を取ることを嫌つて、古い國の大和の景色ばかりを和歌に詠む。

あらしふく三室の山のもみぢ葉は

龍田の川のにしきなりけり

も其の一つだ。秋の野のたそがれに向つて、能因法師の口吟む其の得意の和歌は、だん／＼調子が高くなつて、表を通

る里の子までを振向かせるやうになつた。
「うふ、ふ、ふ。」

能因の朗詠の聲が高くなるとともに、勸童丸が冷笑の聲も高まつた。先刻から勸童丸の笑を苦々しく思つてゐた能因は、たまりかねて、到頭なせ笑ふ。何がをかしい。」と愛童を叱つた。

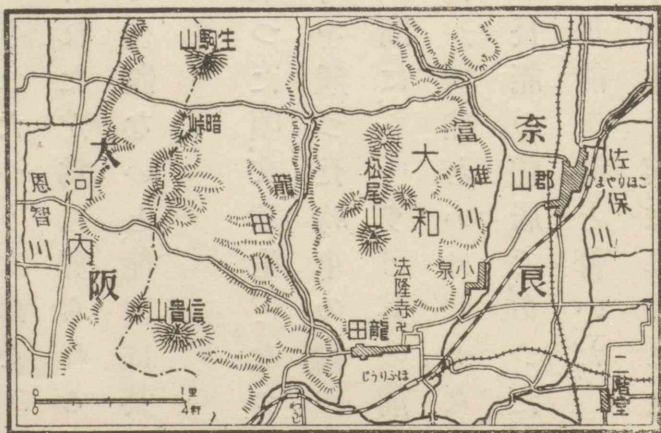
「だつてをかしいんですもの。」と、勸童丸は、長い袖をば、女のやうに口へあてた。さうしてまた「うふ、ふ、ふ。」と笑つてゐる。「をかしいわけを言へ。」と、流石（しゅうじやく）に物靜かな能因も、あまりのこゝと腹を立てたらしく、いきり立つて、圓い頭（まるいあたま）を茹蛸（じゆしやう）のやうにした。

「入道さま。入道さまは、あの邊の土地の様子を御存じあ

平群郡
明治三十九年、
生駒郡と改め
られた。

りませぬな。……三室山は大和の高市郡にあります。龍田の川はそれから別の郡を一つへだてて平群郡を流れてゐます。

あの山とこの川とはまるで縁がなうて、いくら強い風が吹いたとて、三室の山の紅葉が、龍田の川を流れるはずがありません。ちやうど愛宕山の木の葉が、この古曾部の里の檜尾川を流れないやうなものであります。わたくしは大和櫻井の生れで、あの邊の土地の理（ことわり）をよう知つて居り



龍田川附近の地圖

ます。」と、勸童丸はしとやかにいつた。

「さうか……」と、能因は苦水を飲まされたやうな顔をした。あたら名作の和歌をば、地理に外れたが爲に葬られるやうなことがあつては、和歌の神へも勿體ないと、能因は其の夜から煩悶し始めた。

我、昔いまだ俗體で、橘永愷トキと名乗つた頃、文章生となつて、肥後の進士と稱し、或日車で都の町を通つた時、車の輪が損じて、替への車を取りにやつてゐる間に、ちやうど其の前の家へはいつて休息に及んだ。それが偶然といはうか、なんといはうか、一代の和歌の名人藤原長能の住居であつた。それを縁に自分は和歌をまなんで、長能を師と仰いだ。それ以來、今日まで一度も人から自分の作を笑はれたことが

文章生・進士
昔大學寮で記
傳及び詩文を
學んだ學生。
藤原長能
和歌の名人。
圓融・華山・一
條の朝に歴事
し、從五位上
に叙せられ、
伊賀守となつ
た。

ない。

山ふかみ落ちてはつもるもみぢ葉の

かわける上に時雨ふるなり

これが長能に教はつた手ほどきであつた。私はもう初から名人だと思つてゐる。それに今日、この年になつて、人もあらうに、手飼の童子から、我が作を笑はれようとは、かたじけなく残念無念と、能因は齒をくひしばつた。さうやつて其の夜はまんじりともしなかつた。さうして其の翌日も翌夜も。

「こりや勸童丸つ。」

夜の明けるのを待つて、能因は大聲に童子を呼んだ。さうして問うた。

「龍田川のみな^かみにはなんとといふ山がある。」
「龍田山があります。」

と勸童丸は物の響に應ずるが如く答へた。

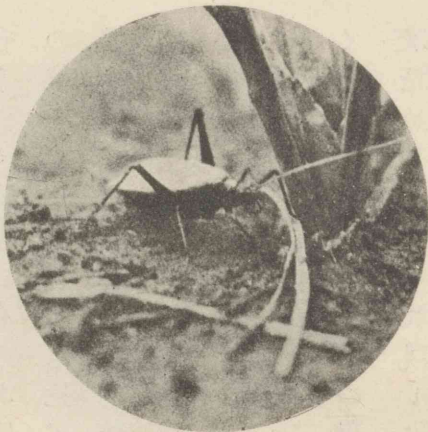
「よし。これから其の龍田山の名を三室の山と、おれが變へてやる。歌の中の地理と實地とは同じでなくてもよいのぢやが……あはゝゝゝ。」と笑つて、能因はこゝに少しく満足した。(週刊朝日)

九 蟲の聲 (自習文)

沼波武夫

私は一年の中で秋が一番好きだ。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きてゐるか。」と問はれれば、「秋を味はふのが生存の一つの目的だ。」と答へるくらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ず

沼波武夫
瓊音と號す。
名古屋人。
文學者。昭和
二年七月歿す。
年五十一。



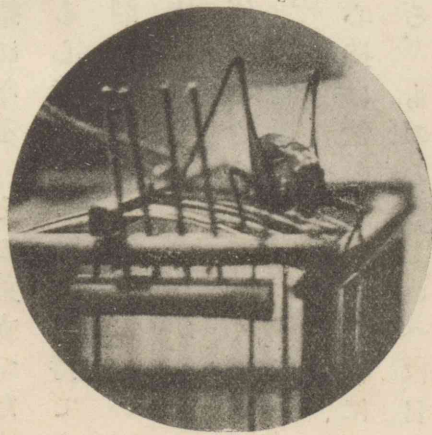
鈴 蟲

る心持はどうかといふに、荒立つた後にくる澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落ちついた心持になる。その荒立つた感情の後にくる心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戦争に飽いて發心した心持にでも喩へようか。とにかく細かく、優しく、さうして澄んだ感じである。

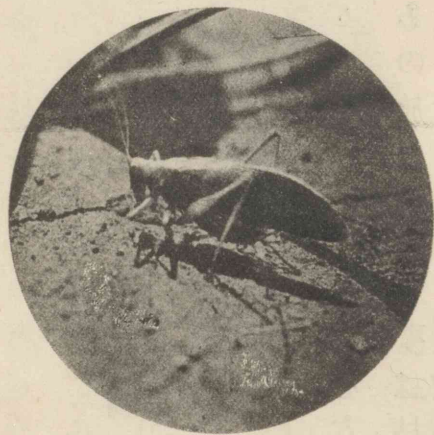
かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。ものの形でいへば、日光・月光・雲・草花など、それ等のものにもこの心持は著しく現れてゐる。匂いでいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺にくるものでは蟲の音、そのすべてに前に述べた感じは現れてゐるが、殊に蟲の

音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろ／＼な小鳥が啼くし、夏の盛りには蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春のおぼろ夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は卑俗で、單調で、蟲の音ほど複雑な、優美な、さうして細かな感じを起させない。その點に於て、蟲の音は最優等で、前に述べた秋の感じなり味はひなりを、一番深く表してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は内的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開くやうな氣持がする。



すりざりき



馬道虫

蟲の音は、俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き始める。それもいゝ。秋に入つて月夜に鳴くのもいゝ。闇夜に鳴くのもよく、また聞きながら眠に入るのもよく、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ／＼違つた情趣と味はひとつがあつて、いづれもいゝ。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或寂しい驛に着いてふと蟲の音を聞くことがあるが、旅の哀れも一入覺えられて、深い味はひがある。又、夜の銀座の明るい賑やか

な通を歩いてゐて、ちよつと細い暗い路地に入ると、足下で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋、毎晩蟲の音を聞いて、それが

冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づくくと、たまらなく寂寥を覺えるものである。(しる椿)

相馬御風

名は昌治、明治十六年、新潟縣に生る。文學者。

(早稻田出身)

良寛

越後長岡の歌僧、天保二年寂す、年七十五。

一〇 芭蕉翁と良寛和尚

柳屋風

芭蕉が死ぬ四日前に、「これは辭世にあらず、辭世にあらずるにあらず、病中の心なり。」といつて弟子達に示したといふあの「旅に病みて夢は枯野をかけめぐる」の一句と、良寛和尚が同じく死病（ひょうびょう）の床（とこ）にあつて、やはり「辭世にあらず、辭世にあらずるにもあらず」といふやうな心持で口誦（くじゆ）んだものと想像される、あの「裏を見せて表を見せて散る紅葉」といふ句と

を比較して味はふ時に、私はいつでも深い冥想裡に誘はれずにはゐられないのである。



相馬御風肖像

「旅に病みて夢は枯野をかけめぐる。」何といふ荒涼たる光景であらう。何といふ寂しい境地（かた）であらう。あらゆるものから放たれた孤獨な魂は、遂にさうした空漠荒涼たる世界に到らなければならなかつたのであらうか。さりとはあまりにいたはしい虚無である。あまりにたよらない孤獨である。わけても「かけめぐる」の一語は、われら凡俗には、堪ふべくあまりにいたましい思がする。これに比べると、良寛和尚の觀（み）た死の姿は私たちに懐か

しみを感じさせるほどのあたゝかさを持つてゐる。「裏を見せ表を見せて散るもみぢ。」私は嘗て此の句を次のやうに味はつて見たことがあつた。



松尾芭蕉肖像

「裏を見せ表を見せて散るもみぢ」——それはその場合の良寛和尚に取りては、決して單なる比喻などではなかつた。彼の眼には、さうした如實の自然が鮮かに眺められたにちがひない。ほのかな黄金光の遍照した静かなうらゝかな秋の空——それを彼は見た。その裡に果しも知らず擴がつた曠野、その曠野のたゞ中に、默然と立つてゐる一本の大きな樹、それを彼は見た。その樹

まつたのむ椎
の木もあり夏
こ立
ばせな

の枝から風もないのに、二ひら三ひら音もなく或は裏を見せ或は表を見せつゝ、舞ひ落ちる美しい色の紅葉——それを彼は見た。さうしてそれが今將に亡びゆかうとしてゐる彼みづからであるなどと思ふところではない。擴充し



松尾芭蕉筆蹟

た絶對化（多分、その心）した心で、彼はおそらく眼前に開かれたその自然の光景を心ゆくばかり味はつたであらう。かくて彼の魂は、今や全く自然そのものの魂であつた。自然と彼とは一如であつた。抑、此の二者の相違はどこか

ら来たか。それだけでも、私たちには容易に解き難い大きな大きな問題である。

二

良寛和尚の手紙に、ものを貰つたのに對する禮狀の最も

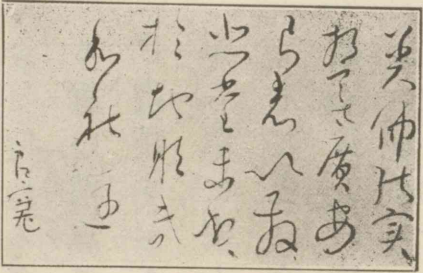
多いことは、一つの特色である。



良寛和尚肖像

これはあのやうな無一物な托鉢生活を營んでゐた和尚としては、當然の結果であらうが、しかし和尚のさうした禮狀の一つの特色は、大抵の場合、貰つた品目を一々書き並べてあることである。此のことは芭蕉翁の手紙と酷似した一つの特例であるが、良寛和尚の方には、そんなに

して、一々品目を並べ立てるほど丁寧なことをしながら、禮の言葉の至極簡單であるのが更に一つの特徴をなしている。



良寛和尚筆蹟

「恭しく受納候。」これが和尚の手紙のきまり文句で、それ以上「有りがたく」とか「御禮申し上げ候」とかいふやうな文句の添へられたものは、今日まで一通も私の目にとまらなかつたといつてもよいほどである。

芭蕉の方は、これと異なつて、「……下され忝く存じ奉り候。貴面御禮申し上ぐべく候。」が、ほぼ定文句となつてゐたやうである。

それはとにかく、芭蕉翁にしても良寛和尚にしても、文句

通りに無一物といつてもよいほどな貧しい境涯にありながら、安んじて生けるしるしを感謝し喜悅してゐたことは、今日傳はる多くの手紙を通して明らかに知ることの出来る貴い消息である。さうして今日の私達にとりて、とりわけ讚嘆すべきことは、此の人達がかく貧しい境涯にありながら、單に安んじ喜び楽しんでゐたといふことばかりでなくして、更に高貴であつたといふことである。あの人達の如く貧しい境涯は稀である。しかもあの人達の如く高貴な生を送つた人も稀である。——此の事實は、私達に取つては、正しく大きな力であり、貴い光であらねばならぬ。

(砂上漫筆)

久米正雄

明治二十四年、長野縣に生る。

小説家。

柳生十兵衛三

巖

宗矩の子。新

陸流劍術の名

手、徳川家光

に仕ふ。

一一 棧道

(その二)

久米正雄

柳生十兵衛三巖は、大和國M坂より出府の途中、中仙道でも嶮を以て鳴るK棧道にかゝつた。暫く行つた時だつた、向ふの山角の道の折れ目から、一人の旅人の姿がぼつりと現れた。

「武士のやうぢやな。」

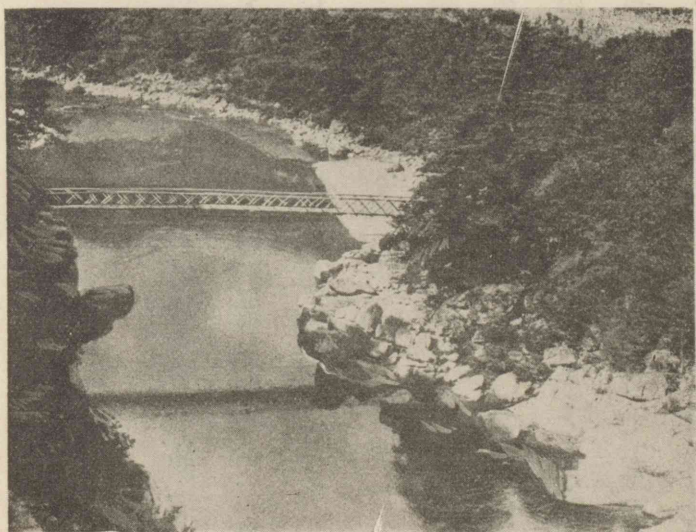
十兵衛は顧みもせず、向ふを見つめて言つた。かういふ棧道で武士に出會ふといふのは、人懐かしくあると同時に、その黒い紋附姿から何か事が起りさうな感じがしたのだつた。事が起つたつて、自分の腕に自信のある十兵衛は、決

して恐怖の念を兎の毛ほど
も覺えたわけではないが、何
かぶるつととするやうな緊張
を感じたのだつた。

「何だか武者修行らしうござ
います。」

又助も肩の荷を揺直して
言つた。それはもう刻々近
づいて、一と目で武者者らし
い恰好がわかつて來た。

向ふも緊張した足どりで、
急がず慌てぬ一步々々をし



道 棧 K

つかり踏んで此方へ近寄つて來る。向ふと此方の距離は
半町ほどに差迫つて來た。右手は山の風雨に削り取られ
たやうな懸崖で、左手は一步誤れば千仞の溪谷だ。棧道の
幅は一間に足りない。

十兵衛は、自分が相手より身分が上であり、且天下に怖れ
る者は無い筈なので、行會うたら自分の方が右手の山寄り
に避けて行違ふのが當り前だと思ふともなく思つてゐた。
それで眞直に平氣で歩いて行つた。向ふの武士も油斷な
く、しかし人懐かしげな様子で、此方をじつと見ながら近づ
いて來た。見ると、黒木綿の紋附は古びてはゐるが、清いで、
袴の穿きやう、草鞋のつけ方、何處となくびつたり格にはま
り、肩つき、腰の据ゑやうも、すつかり法に適つてゐた。

「は、あ、一と廉の武藝者だな。」

十兵衛は十間ほどになつた時、すぐさう思つた。

二人は愈進み寄つて來た、眞直に各道を譲りさうにもなく、さうして雙方一間ばかり來ると、足どりを緩めるともなく、ちり、と据ゑて一瞬間互の顔を見合つて立つた。相手の眼光は、炯々たる光を帯びて此方を見つめてゐた。怖しい武藝者といふよりも、寧ろ高僧か何かのやうに揃つた顔容には、卑しからざる色が見えた。

會釋するともなく立止つて、相手を探り合ふ一瞬はすぐ終つた。十兵衛は躊躇することなく、右手寄りに體を開いて、さりげなく鐵扇を握つたまゝ、ちり、と寄つた。向ふも出會うて眼をあはせるまでは、山寄りに廻らうとしてゐ

るらしかつたが、顔を見合はせた一瞬間、須臾に何かを見て取つて、心を決したらしかつた。同じやうな緩い動作で谷寄りに寄りながら、ちり、と廻り込んだ。

敵意といふほどでなく、一種相手に對する興味で、二人は互にその擦違ふ瞬間に、一刀をさつと抜いて斬拂つたら、敵がどうなるといふことを想像し合つてゐるやうだつた。一方は山、一方は谷、幅一間の棧道で、行違ひさまに斬結ぶとしたら、——十兵衛もさう思つて、じつと相手の廻り込むのを見やると、その呼吸の合つた動作や態度には、驚くべし、一分の隙もない。向ふの眼にも、一種の驚異に似た輝が見えた。

「失禮ながら伺ひ申す。」

「突然ながら伺ひ申す。」

二人が行違つて、斜に逆に廻り込み終つた時、二人の口からは同時にさういふ言葉が出た。二人は眞劍な中に微笑に似たあるものを感じた。

「柳生十兵衛先生ではござりませぬか。」

「宮本無三四殿ではないか。」

それも殆ど口を衝いて出たのが、甲乙なかつた。

「思ひもかけぬ所で拜顔の榮を得申した。」

「余も會ひたいと思つてゐた。」

二人は息をほつと吐いた。

「江戸表へでも御出府の途中でござりまするか。」

「さうぢや。其處許は？」

宮本無三四
二刀流劍術の
開祖、二天と
號す。晝と俳
句をよくす。
正保二年（二
三〇五）歿す、
年六十四。

「諸國修業の途次、これより名古屋へ出て、伊勢路へ參る所でござりまする。」

「F宿は何時頃立たれたのぢやな。」

「宿の亭主が武藝好きで、色々と引とめられ、やうやく午の刻に、止めるのも聞かず、振切つて立つて參りました。」

「ほう、夜を籠めて山越えをさるゝ氣か。して、F宿まではもう何里ほどござるかな。」

「三里もござりませうか。山道とて見當がつかませぬが。」

「今日はF泊りでござりまするか。」

「そのつもりでござる。」

「それならば——。」と、無三四は日を仰いで一寸思案してゐるやうだつたが、咄嗟に思ひついたと見えて、

「某も、もう一度引返してFまでお伴仕りたう存じますが、如何でござりませう。折角此處で拜顔の榮を得ながら、そのまゝ左右にお別れ致すは、何やら心残りでござれば――」。

「其處許の旅路に狂ひなくば、予も亦望む所でござる。」

「では、案内がてら引返し申すと致しませう。」

「さやうなれば、同道お願ひ申す。」

二人は、今度は肩を揃へて歩き出した。

名を聞いたのみで相見たことはなかつたが、日頃會ひたいと思つてゐた劍道の名人同志は、暫く言葉がなかつた。

話の種は數多あるやうだが、何を話題としたらいゝかわからぬやうな一種のぎごちなさを覺えた。殊に尊敬と適度の競争意識を持つてゐる無三四の方は、何だか興奮と緊張

に、其處に聳えてゐるK嶽の如くしやちこばつてゐるやうだつた。

「どうちやつたな、信州路は？何か面白いことはなかつたかな。」

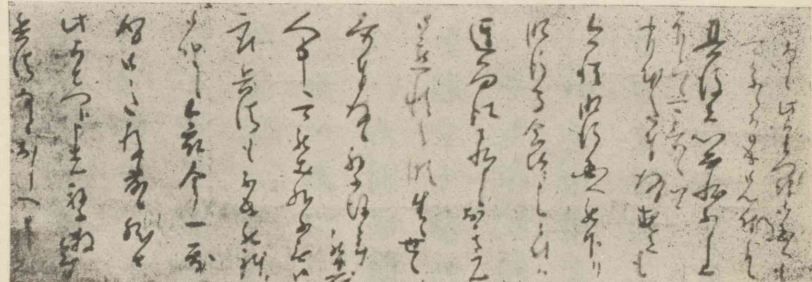
やゝあつて十兵衛の方が話しかけた。

「いえ、別に面白いといふほどのこともなく、この二三箇月を過して参りました。」

「でも、大分御勉強ぢやつたらう。」

「いえ、相變らず惰けてばかり居りますので、面目次第もござりませぬ。木刀よりは繪筆を取つた方が或は多かつたかも知れませぬ。はゝゝ――」。

無三四はいひ過ぎと自嘲の笑を淋しく洩らした。が、十兵



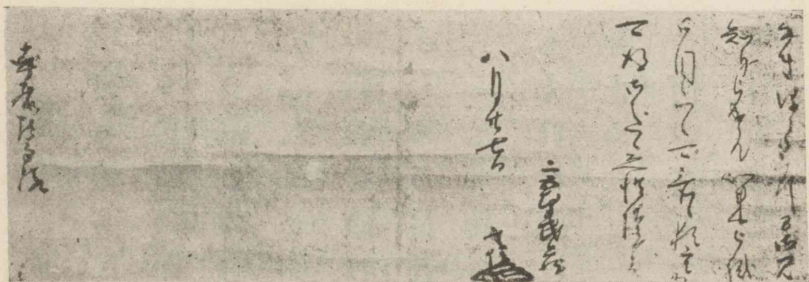
(一のそ) 躰筆四三無本宮

衛は笑を酬いてはくれなかつた。

「成程無三四殿には風流の嗜もあつたのちやつたな。そこへ行くと、身どもの如きは全くの藝無し猿泊りくゝの食物の味不味さへ心に懸らぬ位ぢや。羨しうござる。」

「いえ、全く以て左様なことはござりませぬ。先生の如く只管一筋道に精進なさるこそ、小器用の身に引較べ、羨むよりは仰ぎ見る心地がせられてなりませぬ。」

「何のそんなことがあらう。不器用な身どもは、鍛錬に日を送るより外に道はないのぢや。凡そ武藝だけは極意を極め盡く



(二のそ) 躰筆四三無本宮

したつもりであるても、行けば行くほど奥の極まる所を知らぬらしいでな。」

「さやうでござりまするな。」

無三四は叱られてゐるやうな、皮肉をいはれてゐるやうな同感を求められてゐるやうな感じを同時に覺えた。それにつけても、この機會に一つ、十兵衛と立合つて自分の力を試したい氣が、むらくゝと起るのを制しかねた。

「つきましては、先生に拙者工夫いたしました二刀流の劍法、一度御批判をお願い致したうござりますが。」

「うん、話に承つて御工夫のほど感服致してゐる。いづれ
機會もあらば御手並拜見致すであらう。」

十兵衛の面上にも、すがくしい争氣が現れて消えた。
「有難き仕合はせに存じまする。」

二人はそれつきり黙つて、又歩みを續けた。道は崖續きの
岩石を抜けて、木の茂みの多い山道となつた。三人の踏
みしめる足音が、たたまのやうに木の梢をゆるがした。

ふと、十兵衛は歩みを緩めて立止りさうにした。無三四
もそれに連れて何事かと思つたやうに、油斷のない足どりを
止めた。

「何の實でござらう。」

十兵衛は、道を外れた谷へりに立つてゐる一本の木の中

ほどを、じつと子供のやうに見つめてゐた。そこには蔓を
なした枯葉の間に、赤紫色に熟れて、笑割あみれて腸を出した長
い實がぶら下つてゐた。

無三四は微笑した。

「あゝ、あれでござりまするか。あれは通草あひびの實でござる。
これからの道のべには殊の外多うござる。」

「はゝ、あ、左様でござるか。名は聞いたが見るのは初めて。
食べるものでござらうな。」

「山の子らが好んで食するもの。鄙びた美味、棄難うござ
る。何なら一つ採つてお目にかいませうか。」

「左様でござるな。」

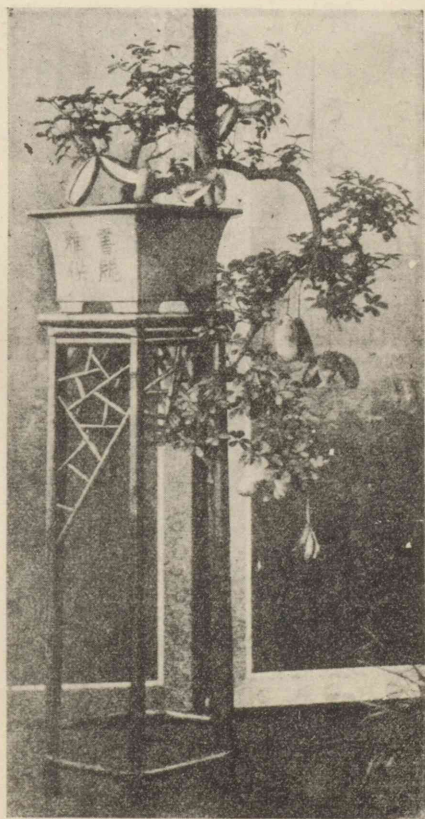
十兵衛は笑顔で答へた。

通草
蔓生灌木で、
葉は掌状複葉、
花は淡紫色、
實は長楕圓形
で食用に供せ
られる。

「然らばお待ち下されい。」

無三四は一寸袖づくりのひをして、崖に沿うた道端から、手を延ばせば、やつと届く位の其處の木立へ體をさしのべようとした。其處は指一本でも加へて押せば、無三四の體が防ぎやうもなく、そのまゝ谷底へ落ちてしまふべき場所だつた。

十兵衛は此方の道から、息をぐつと籠めて無三四の様子



(フラゲヒサア) 草 通

を見てゐた。

無三四は崖縁まで行くと、何氣なく一瞬に足場を見定めたらしかつた。さうして左右の足を然るべき廣さに開き、體をじつと虎の如く忍ばせて、通草までの高さを窺つた。

十兵衛は此方から見てゐて、無三四の後向きの體に少しの打込む隙もないのに感心してゐた。が、崖の縁ではあり、通草まではやゝ高いから、その中には構の破れが出来るであらう。さうしたら一と氣合、えいつと掛けてやらうと思つて、じつと睨んでゐた。どうやら無三四の方でも、その氣勢を見えぬ後に感じて用意してゐる様子が、隙のないうしろ正眼にあり、現れてゐた。あれでは一太刀斬込んで、素早く身をかはしおほせるであらう。殊に右足に含ま

うしろ正眼
正眼の構を前
後して、左右に
の上下左右に
氣を配ることに
正眼の上で、劍
術の的に自敵の
目の的を自敵の
向けて構へるな
こと

天狗飛切
劍道で高く飛
上つて敵を斬
仆すといふ術。

れた力は、何時でも例の天狗飛切で、崖の縁から道の中央へ跳返り得ることを示してゐる。

しかし手を延ばして通草を取る瞬間は、どうするだらう。その時こそ體は崩れ、隙は生ぜずにはゐまい。……と見てゐた瞬間、やつといふ低い地に響く一と聲がして、ぱつと彼の體は飛んだ。さうして一瞬に通草の實を片手に握つたまま、少し離れた足場の確な岩角へ、此方むきに飛移つてゐた。神色變らず、彼は微笑しながら、その妙な形をした果實を十兵衛の所へ持つて來た。

「や、これは見事な通草の實、わざ／＼忝うござつた。」
十兵衛も微笑を含んで受取る外はなかつた。さうして珍しげにと見^{（あやう、うま）}かう見してゐたが、まさか食ひもならず、後を

顧みて言つた。

「又助、通草の實ぢやとよ。その方も初めてぢやらう。食べて見い。」

「はつ。——有難う存じまする。」

又助はそれを受取つて、暫く躊躇してゐたが、やがて思ひきつてがぶりと口をつけた。さうして妙な顔をした。

「どうぢや、又助、味は？」

「何だか甘澁うて不思議な味でござりまする。」

「さうか。我慢して食はんでもい。」

十兵衛と無三四は、笑つて又歩き出した。

小半里ほど行つた。相變らず左手は溪谷で、千仞の谷をなしてゐた。が、道はやゝ、岩石の破片が少くなつて、秋草が

離々
長く筋になつ
て見える様子。

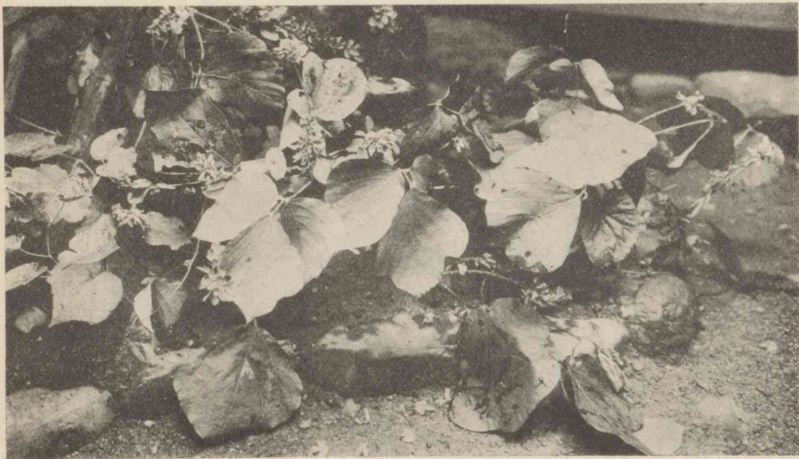
生えてゐた。日が向つ峰を半ば掠めて、道草へ離々たる影を投げてゐた。ざわ／＼と風が出て来た。ふと、又十兵衛は立止つた。見ると、その眺めてゐる方角には、一むらの草の廣葉が風を受けて戦いてゐる中に、薄紫の小さな花が點々と可憐な姿を現してゐた。そこは又絶壁の端だつた。

「あれは何の花だらう。」

又も十兵衛は無三四を顧みて言つた。

無三四も淋しい微笑を以て又答へた。「大方葛の花かと存じまする。佗しい姿でござるな。」

「成程、あれが葛の花か。どれ一つ拙者手づから手折つて来て見よう。葛の花位なら、拙者に似合はぬ風流でもある



葛の花

まいほどに。」

さういふとともに、十兵衛はもはやつか／＼と崖のふちの方へ進み寄つて、早速その蔓草の花のあたりに手をさし延べてゐた。今度は無三四が微笑を顔から消して、じつとその後姿を見守つたが、そこには隙だらけの何の用意もない後姿が、たゞ崖を前にして何時でも突落してくれといはぬばかりに立つてゐるきりだつた。

が、斬附けるとしたら、何處からどう斬附けるべきだらう。隙につけこむと云つても、取立てて何處を選ぶべきか。無三四は心の中の氣合を忘れて、ぼんやり見てゐるきりだつた。

その中に、十兵衛は一束の花を携へて戻つて來た。「葛の花といふものも、よく見ると豆の花のやうぢやな。」さういつて、彼は又助にそれを手渡しつゝ、まだぼんやりしてゐる無三四を促すやうにして歩みを續けた。(木靴)

一二 棧 道 (その二)

久米 正雄

彼等がF宿の旅人宿檜木屋へ着いたのは、もう夕景だつ

た。

「おい主人、又戻つたぞ。今度は珍しい客人のお伴をして参つた。M坂の先生ぢや。」

無三四が門口でさう呼んだ。

「へえ、あの柳生先生で？ 左様でござりましたか。それは何といふ僥倖……これ誰か早くお洗水を持つて來なは、あ、あの途中でお會ひなされて、そのまゝ……左様でござりましたか。……誠に有難い仕合せで……」

劍術が好きで、宿の裏手には道場までこしらへてある宿の主人は、二人を下にも置かぬ歓待をした。風呂も清く焚直した。山魚料理も念に念を入れた。その夜は疲れてゐるのか、別にさう話をし合ふこともな

く、二人は別々な部屋に引取つて寢た。さうして翌朝になつた。無三四は早く起きた。十兵衛主従も、もう眼覺めてゐるらしかつた。

「おい主人、朝餉あさぐひの仕度はまだか。今日は早う立つぞ。」

無三四は朝の挨拶に來た主人にさういひかけた。

「へえ、ではもうお立ちで……。」

主人は意外さうに眼を見開いた。

「さうぢや。なぜ？」

「いえ、なに、あの、柳生様とお手合はせでもなすつて、それからお別れになるため、此處までお戻りになつたのかと、奴は存じて居りましたので……。」

主人はその期待が外れたので、口を開いたまゝさう言つ

た。

「はゝあ、さうか。——だが、その立合ならもう昨日濟んだ。」

無三四は靜かに微笑を啣んでいつた。

「へえ、何處でおやりになりました。」

「棧道でやつた。」

「して、何方のお勝でございました。」

主人は思はず膝を乗出のりだしてさう露骨あからさまに訊ねた。

「うん、残念ながら拙者の負けやつた。柳生殿の劔法は、さすが古今獨歩といふだけあつて、拙者などの小器用な工夫の、逆も及ぶ所ではない。天衣無縫ぢや。」

「はゝあ、左様でござりまするか。」

「もう十年、十年も修業したら、あそこまで行けるかな。」

天衣無縫
天女の衣には
縫目が無いや
うに、技工の
跡がなく、圓
満完全で立派
なこと。

無三四は獨言のやうに言つてゐた。

無三四の部屋を辭した主人は、今度は柳生十兵衛の部屋へ罷り出た。

「お早うござります。何事も行届きませんで……。」

「おう、亭主か。いろ／＼な心盡くし、有難かつたぞ。今日は又早立ちや。朝餉を早うしてくれぬか。」

十兵衛は苺たはをふかしながら、落着いてさう言つた。

「畏りました。――ですが先生、誠に恥づかしうござりますが、私奴はこれでも大變劍術が好きで、この宿でも氣狂といはれ、むさくるしい道場でござりますが、裏手に一つ小さなまで建ててゐるものでござります。就きましては、一生に一度の思出には、先生と無三四先生とのお手合はせを

拜見出来ませんものでございませうか。」

主人は無理を叱られるのは覺悟けいごの上の、脇の下に汗をかきかきさう申し述べて見た。

すると、その答は又前のやうに静かだつた。微かに十兵衛は笑つたやうだつた。

「なに、無三四殿との手合はせ？ さうか、それは惜しいこと、昨日濟んだよ。」

「棧道でございますか、あの狭い……？」

「うん、さうぢや、絶壁の前でぢや。」

十兵衛は更に静かな顔をした。

「して、それは先生のお勝でございましたらうな。」

「いや。」 静かに十兵衛は首を振つた。

「さうでない。その時は予が勝つたつもりでゐたが、今考へると、負ぢや。後手だけに負ぢや。」

「一體、どういふ御勝負だつたのでござります。後學のため、私奴のやうな奴にも、好きな道しるべ、御示教願はれますまいか。」

「うん、いや、なに、立合といつても、木刀や鐵扇を取つてではない。初め、無三四殿が絶壁の先にある通草の實を、後から見ても、見事、一寸の隙も見せず採られた。予は心の中で、『やつ』と氣合を掛けるとともに、無三四殿が手を延ばして取らうとする瞬間を目がけ、打込んだと思つて見た。が、その一刹那、無三四殿は、もとより此方の氣合を察せられて、一息ぱつと身をかはすとともに、もう通草の實を掴んで、安全

な岩角に此方を向いて立つて居られた。用意のほど、十兵衛感服致した。」

「へえ、では目に見えぬ立合をその時なされたのでござりまするな。――ですが、それならどうして無三四先生の方で、此方の先生に立合つて負けたと仰しやつて居られるのでございませう。實は先刻、彼方へ御挨拶に伺ひました所、やはり棧道に於て先生と立合の上、自分が負を取つたと申し居られましたか……。」

「ふうん、さう申し居つたか。それは然し、先刻も言つた通り、やつぱり予の負かも知れんのぢや。――といふのはな、それから暫く山道を行つた所で、葛の花が咲いてゐた、同じやうな絶壁の端にぢや。それを今度は、予が採りに立つたの

ちやが、その時予はもうどんなに隙を見せぬ構をしたとて無三四殿と同じで、劣るとも優らぬと思つた。その上無三四殿の工夫が餘りといへば餘りに隙がないのに、反對の心持を持つたのちや。それで思ひきつて、何の構もせず、一命を天に任せた氣で、無想無念に、子供の心で葛の花を手折つて見た。それを見て無三四殿は氣を吞まれたやうにぼんやりして居られた。それで恐らく自分が負けたのちやと思つたのであらう。

「は、あ、左様でござりましたか。さういへば無三四先生は、先生の劍法を天衣無縫とやら申して居られました。」

「ほんとに天衣無縫な武術なり何なりがあるならば、誠に天下の至寶に違ひないのちやがな、大抵の天衣無縫などは、

要するに粗暴な見せかけに過ぎんやうちや。予のもたゞ後手を引いて外に術がないから、無を以て有へ通じさせるやう見せかけたまでちや。その證據に、あの時眞に若し打込んで來られたなら、予は一たまりもなく打据ゑられるか、千仞の谷へ落ちたであらうからな。そこちや、今となつて、人智心巧の限りを盡くした無三四殿の劍法の方が、やはり勝ではないかと思はれたのは。——いづれ十年もたつたら隴氣にこの間の消息がわからうかな。」

十兵衛三巖も、最後に呟くやうに附加へた。

かうして、そのまゝ、炊煙の白いK街道を柳生十兵衛三巖と宮本無三四政名とは、朗かな挨拶を交はして東と西とに別れ去つた。

霜を含んだ大氣が旭に搖いで流れる朝だった。(木靴)

一三 現代和歌大觀 (その二)

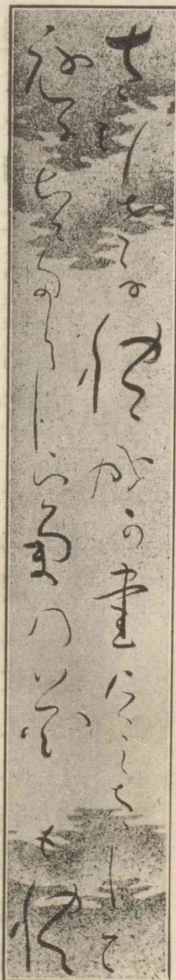
金子薫園

鳥のかけ窓にうつらふ小春日に

木の實こぼるゝ音靜かなり

金子薫園
名は雄太郎。
明治十年、東
京市に生る。
故落合直文門
下、歌人。

さびしさに秋
成が書よみさ
して庭に出で
たり白菊の花
白秋



蹟筆秋白原北

北原白秋

名は隆吉。明
治十八年、福
岡縣柳河に生
る。詩人。

日のさかり細きするどき萱のほに

北原白秋

太田水穂

名は貞一。明
治九年、長野
縣に生る。歌
人。

蜻蛉とまらんとして翅かゞやかす

秋の目ばかりのつどきやう子

太田水穂

われ行けばわれにつき来る瀬の音の

寂しき山を一人越え行く

齋藤茂吉

齋藤茂吉

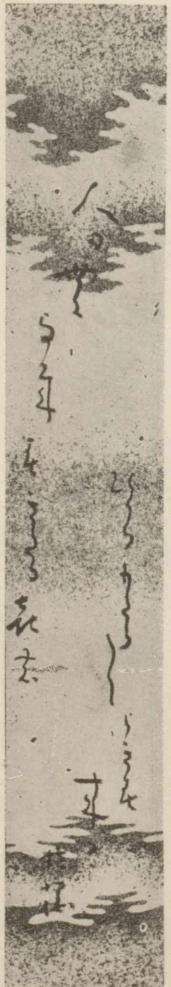
明治十五年、
山形縣に生る。
醫學博士。故
伊藤左千夫門
下。アフラギ
派の歌人。

來て見れば雪げの川へ白がねの

柳ふゝめり露の臺も咲けり

けりるよ則や

人の世によき
春きたる喜の
ひかりもたら
しよき春來る
信綱



蹟筆綱信木々佐

佐々木信綱

おぼつかないづこに向ふ道ならん

はより京

佐々木信綱
竹柏園と號す。
明治五年、三
重縣に生る。
文學博士。歌
人の萬葉集研
究の權威。

窪田空穂

名は通治。明治十年、長野縣に生る。歌人。

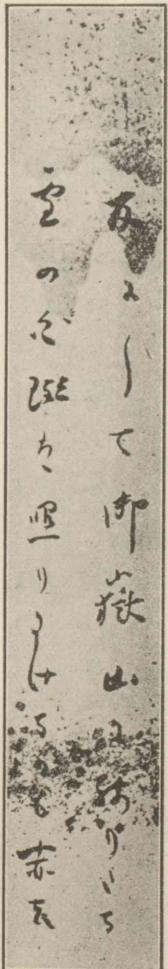
果なく白くつゞく一すぢ

窪田空穂

大海の底に沈みてしづかにも

耳すましゐる貝もあるべし

夏にして御嶽山に残りたる雪の白斑は照りにけるかも
赤彦



蹟筆彦赤木島

島木赤彦

本名久保田俊彦。長野縣の人。アララギ派歌人。大正十五年歿す。年五十一。

島木赤彦

春山に木を樵る子らは思なからん

遠く居りつゝ物言ひかはす

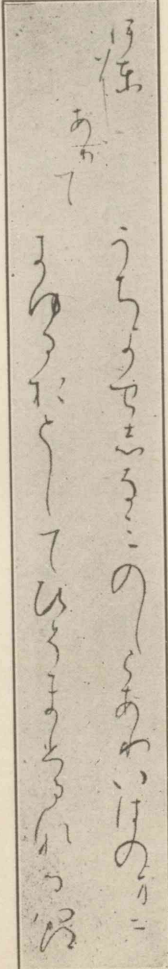
尾上柴舟

名も知らぬ小草の蔓は畔越えぬ

尾上柴舟 名は八郎。明治九年、岡山縣に生る。歌人。文學博士。

うちよせしなみのしらあわいはのまにきゆるおさしてひきまごふなる 八郎

春の力の満てるさまして



蹟筆舟柴上尾

尾山篤二郎

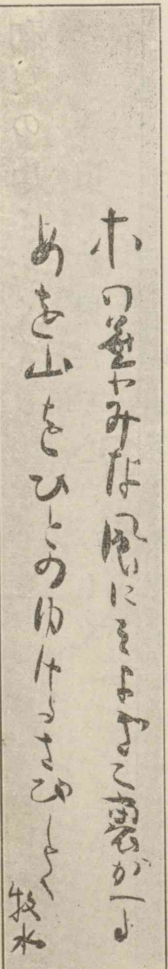
明治二十二年、金澤市に生る。歌人。評論家。

尾山篤二郎

源の九郎の館に美草生ひ

木立まばらにして鯛なけり

木の葉みな風にそよぎて裏がへるあか山をひさのゆけるさびしさ 牧水



蹟筆水牧山若

若山牧水

名は繁。宮崎縣の人。歌人。昭和三年歿す。年四十四。

若山牧水

春の木は水氣ゆたかに鈍切の

前田夕暮

名は洋三。明治十六年、神奈川県に生る。尾上柴舟に學ぶ。歌人。

よしといふなり春の木を伐る

前田夕暮

初夏の山ふかく入り山ざくら

白きを見たり心さびしく

(物寂しげに)

急なれる山に面をかひ足もたに
ちからをいれて岩ふみのほる初玄

蹟筆玄利下木

急になれる山に面をかひ足もたに力を入れて岩ふみのほる 利玄

木下利玄

子爵。岡山縣の人。竹柏園の歌人。大正十四年歿す。石榑千亦名は辻五郎。明治二年、愛媛縣に生る。「心の花」同人、歌人。

木下利玄

ほしいまゝに伸びあがりたる波のおもみ

倒れたまゝまりとゞろと鳴るも

石榑千亦

父もふみ母もふみけん土の香の

川田順

明治十五年、東京市に生る。「心の花」同人、歌人。

その香にしあれや懐かしその土

川田順

鴨川のかはらに白う流れたる

春の霜夜の月あかりは

中村憲吉

新芽たつ林にこもる家の壁

月照りくればしるけく浮く

土岐善磨

新しき白き表紙を開かんとして

手の汚れをば悲しめるかな

土岐善磨 哀果と號す。明治十八年、東京に生る。歌人。東京朝日新聞學藝部長。

中村憲吉

明治二十二年、廣島縣に生る。「アララギ」同人、歌人。

巖谷小波
名は季雄。明治三年、東京市に生る。お伽噺の作家。

一四 大統領の謁見 (自習文)

巖谷小波

九月
の明治四十二年
の九月、渡米
實業團がアメ
リカを漫遊し
た時のこと。
ミシガン州
北米の中
部最北に
ある州。
Michigan.



巖谷小波肖像

大統領といへば一國の元首、これに謁見するといふ事は、日本式に考へると頗る大切な事であります。無論アメリカであつても決して大切な事は無いが、其の手軽さ加減に至つては、とても皆さんの想像も出来ない位です。それはちやうど大統領が旅行中であつた爲でもありません。せうが、それにしても頗る無雑作なものでした。

時は九月十九日、所はミシガン州のミネアポリス市——しかも其の市中を離れた、ミネトンカといふ湖水の側のラファエツト俱樂部といふ極めて質素な建物の中でした。

シヤトル
カナダの
太平洋岸
にある港
Seattle.

尤も此の事は、私どもがシヤトルに上陸した當時に已にわかつてゐた事なので、大統領の巡遊と私どもの回遊と其の日程を繰つて見ると、ちやうど此の日、此の場所、兩方から出會ふ勘定になるので、即ち其の日を以てそこに謁見の式を擧げる事と、同地の歓迎委員連が豫め手筈をきめたのです。何の事はない、太陽と遊星とが或軌道で落合ふやうなもの。これが眞の太陽と星なら、それこそ大事件が起るので、アメリカ大統領と日本の實業團との邂逅では、これによつて兩國の交際が益、暖くこそなれ、爲に世界が顛覆するやうな大騒の始る氣遣ひはありません。

さて當日は兎に角今度の旅行中一番晴れの日ですから、私ども一行は何れも念入りに顔を剃つて、プロツクコートの皺を伸ばしシルクハットの塵を拂つて、何れも定め時刻までに、定め場所へと練込みました。

原

すると大統領は、もうちゃんと先に來てゐて、別室に待つてゐるといふ始末。そこで、何も控所に入つて手先など洗ひ清める間もあらず、用意がよくば謁見所へお出でなさい。」との事でした。

ところで其の謁見所といふのは、玄關を入つて右へ行つた、時にはダンスでも行はれようかと思ふ廣間——其の廣間の中央に大統領タフト閣下は其の從者を隨へて悠然と立つてゐられます。

そこへ私どもは澁澤男爵を眞先に順を作つて一列になり、次から次へと進んで行つては、水野總領事の紹介で一々握手の禮をしたのです。

元より握手をする時は、先方の顔をじつと見るのが作法になつてゐますから、此方は更に頭もさげず、圖々しく閣下の顔を見あげると、閣下はにこやかな笑みを浮べて、其の人相應な挨拶をして一人々々に愛想をいはれます。其の又當意即妙な事は唯恐れ入るの外あり

當意即妙
當座にきてん
をきかすこと。

ません。

此の時は婦人連も無論謁見しましたが、閣下は殊に物優しく此の人々の手を握つて、

「今度の一行に婦人の加はつた事は實に自分の喜ぶ所である。何卒日本人も今後はかういふ風に婦人を外へ出すやうにして貰ひたい。」などと愛嬌を振りかけられました。

さうかと思ふと、紐育に店を持つてゐる絹貿易商の堀越君に向つては、

「君のやうな人が、日本から良い絹を持込んでアメリカの女に見せびらかすから、おかげでアメリカの男達は一所懸命に働かねばならぬのだ。」

などと皮肉な事もいはれます。

こんな風で謁見が済むと、直に午餐の御陪食となりましたが、これ

が又至つて簡單なもので、ちやうど大統領の座を占めてゐる後僅かに三尺ほどを隔てた明け放しの窓の外には、近所の爺さんや婆さんや子守や門番のやうな者までが、皆ものずきに覗いてゐるので、時々巡査に制せられて一間ほど退きますが、隙を見ては又寄つて來て窓に取附かないばかりにしてゐます。

一體今の大統領は、曾て陸軍卿であつた時分、我が邦へも二三度來られた事がある位で、大の日本最眞の方です。さればこそ當日の演説にも、心から私どもの渡航を喜び、又今後も兩國の間は、益、親密にしなければならぬと熱心に論じられました。が、兎に角至つて無難な形、しかも至つて打解けた此の日、此の場の有様は、堅くるしい窮屈な形式ばかりの謁見より、どれ程有難く又愉快であつたか知れないので、す。(新洋行土産)

谷崎潤一郎

明治十九年、
東京市に生る。
小説家。
西湖
支那浙江省に
ある勝地。

一五 西湖の月

岩崎江子



像肖郎一潤崎谷

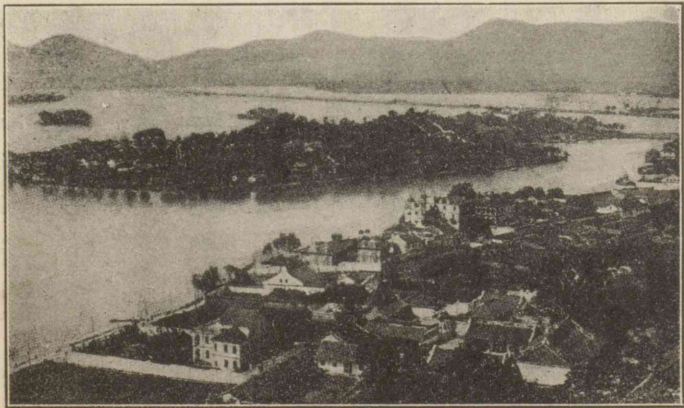
夕食を済ませた後、ホテルの後の碼頭まごうから畫舫に乗つて出たのは、其の晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舫ふねに座を占めて、一點ちとの曇もない大空の月の光を滿身に浴びてゐた。如何に限なく晴渡つた月であつたかといふ事は、湖を取巻いてゐる四方の山々や、汀に近く女の洗髮のやうにうなだれてゐる楊柳や、稀には岸邊の樓閣などまでが一つ／＼其の影を

潯陽江
支那江西省を
流る、河。

洞庭湖
湖南省にある。
鄱陽湖
江西省にある。

水面に落してゐたのでも、大凡想像する事が出来よう。
嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を觀た時に、雄大な廬山の山
容が水にくつきりと映つてゐるのを眺めた覚えはあるけ
れど、今夜の月はあの時にも増して朗かである上に、湖の廣
さも亦甘棠湖よりは遙かに大きい。水の面といふのは、そ
れでなくともかういふ晩には實際より廣々と見えるもの
だが、船がだん／＼陸を離れるにつれて、私の行手に湛へら
れてゐる湖の水は、腹が膨らむやうに底の方から盛り上つ
て來て、次第に岸の遠くの方へ追ひやつてしまふのである。
こゝでちよいと斷つて置きたいのは、西湖の風景が美し
いのは、主として其の湖水の面積が洞庭湖や鄱陽湖のやう
な馬鹿々々しい大きさでなく、一目で見渡される範圍に於

て、蒼茫とした廣さを持ち、優しい姿をした周圍の山や丘陵
と極めて適當な調和を保つてゐる點にあるのだと思ふ。雄大だと思
へば雄大なやうにも見え、箱庭のや
うだと思へば箱庭のやうにも見え、
其の間に入江があり、長堤があり、島
嶼があり、鼓橋があつて、變化はあり
ながら一枚の繪を擴げた如く、總べ
てが同時に雙の眸にはいつて來る
のが此の湖の特徴である。今夜に
しても、船が進むに隨つて無限に大
きく開いて行くやうに覺えながら



湖 西

も、陸は決して地平線の向ふへは隠れてしまはない。が、其の實岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと遠くにあるもののやうに感ぜられる。

首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろそろと眼を下の方に向けると、私の視野にはいるものは、やがてたゞ一面の波ばかりになつてしまつて、何だか船が水の上を渡つてゐるのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。もし人間がほんたうにかういふやうな心持で、靜かに、船に揺られながら、水の底へ沈んで行く事が出来たなら、溺れて死ぬのも苦しくはなからうし、身を投げるのも恐しくはあるまい。おまけに此の水は月明りのせるもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやう

に透徹つてゐるので、鏡にも似た其の表面に、船の影が倒に映つてゐなかつたら、殆ど何處から空氣の世界になり、何處から水の世界になるのだから區別がつかないほど、底の方まではつきりと見えてゐるのである。吃水の浅い、草履のやうに薄つべらかな船の上に横たはつて、水と空氣との相觸れる平面を滑かに進んで行く私の體は、たゞ濡れてゐないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したといつてもいゝくらゐである。

舷に顔を出して底を視極めると、深さはもう二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜、水清淺」といつたのは、思ふに此の湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美しさとは、かうして此の底を眺める時に、始めて明らかに會得する事

林和靖
支那宋時代の
詩人。
疎影……
「山閣小梅」の
題下の詩。

が出来た。私は先に深山の靈泉のやうに透徹つてゐるといつたけれども、ただそれだけでは到底此の時の感じをいひ現すには物足りない。なぜかといふのに、此處に湛へられてゐる三四尺の深さの水は、靈泉の如く清冽なばかりでなく、一種異様な例へばとろゝのやうに重みのある滑かさ
と飴のやうな粘りとを持つてゐるからである。此の水の
数滴を掌にたんていぎをかをすに掬ひんで暫く空中にまに曝すして置いたなら、冷やかな
月の光を受留とどめて、水晶の如く凝固こくつてしまふだらう。
私の船の櫓は、其のねつとりした重い水を、すらり〜
と切つて進むのではなく、ぬら〜と捏返すやうにして操
られて行くのである。をり〜櫓が水面を離れると、水は
青白く光りながら、一枚の羅衣のやうに、それへべつたりと

纏まとり着く。水に纖維があるといつてはをかしいけれど、全
く此の湖の水は、蜘蛛の絲よりも更に微かな、さうして妙に
執拗な弾力のある纖維から成立つてゐるやうにも感ぜら
れる。

兎にも角にも、綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく、
寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そんな感じがす
るのは、一つには其の水底に蒼苔のやうに細かい藻草が密
生してゐて、柔かい天鵞絨の床の如く、暗緑色の光澤を反射
してゐるかげんやうせゐるでもあらう。實際それは、非常に精巧な驚く
ほど美しいつやと潤とを持つた天鵞絨といふより外に適
當な言葉を知らない。さうして大空の月の女神は、其の天
鵞絨の地質を一層つや〜と光らせるために、無数の長い

銀の絲で蛇のうねりの如き波紋を一面に縫取つてゐるのである。もし此の湖に仙女があるならば、彼の女の纏ふべきマントの色は、必ず此の天鷲絨であるに違ひない。底が餘りに浅いためにどうかすると、櫓は心なくも其の天鷲絨の面を揺亂す。ぱつと砂埃が風に舞上るやうに、濁つた泥が圓い輪を描いて煙の如く水中に浮び上る。(西湖の月)

一六 霧

長幹

がたく、軋む戸を開けて見ると、私は思はずぎよつとして、そこに立ちあすくんでしまつた。戸外には、霧と云ふにしては、餘りに濃い何物かが一杯に立罩めてゐるのであつた。

長田幹彦
明治二十年、
東京に生る。
小説家。



長田幹彦肖像

灰が二面に降りこめてゐる。それでも、形容するには、まだ言葉が足りない。灰色をした布を張廻してあると言つても、恐らくは、その概念をだに思ひ浮べる事が出来ないであらう。

私が戸を開けて霧と面を合はせた瞬間の感じは、はたと何かに突當つたやうな感じであつた。じつと眼を据ゑて見てゐると、その霧の姿が段々と

眼に馴れて来る。小屋の中から流れ出て来るランプの光は、濛々とした霧の中に、戸口の明るさを、四角にくつきりと印して、その中に氣味の悪いほど大きな私の黑影を、手で攪めるやうな濃さでまざくと描き出してゐるのであつた。

私は先づその凄じい光景に眼を奪はれてしまつた。

「いや、こりやひどい霧だなあ。これちや一間先も見えんなあ。」私は我を忘れて叫んだ。木村は私の肩の所から首を出して、「一間先どころか三尺も離れてゐるものは皆目見えななのだ。それ御覽なさい。そこにある薪の山が、何時もなら見えるんだが、今夜は見えないですよ。」

さう言はれば、ちやうど戸口の所に積んである薪が少しも見えない。その間の間隔は、わづか三尺か四尺のものであらう。それが見えないのでも、私には霧の深さが思はれるのであつた。

私は戸口から離れて霧の中へはいつて見た。小屋の口から二間も離れると、もうランプの光は朦朧として、不思議

な光環を被つた日蝕時の太陽のやうに、紅く霧に滲んで見えるばかりである。手を振つて見ると、それにつれて、無数の灰粉が揺蕩するやうに思はれ、底冷のする寒氣とともに、霧の匂が鼻を衝くやうな氣がする。私は立止つて眼を据ゑて霧を凝視した。

と、その時になつて、霧がさながら生あるもののやうに、徐々として蠢いてゐるのがやつとわかつて來た。

霧は極めて緩やかな進度で、山の頂から、麓の方へ向つて



霧

線と延び、昇りつゝ降りつゝ一團の黑影の様にと密集するかと思ふと、忽ち散つて萬片の木の葉の空に舞ふ如く、曇つた空の灰色雲を背景にして、様々な行動をしてゐるのである。或時は森の中の一本高い樅の木の枝に二三羽の鴉が止つてゐると、其の周圍を幾百の渡鳥が群をなして、隙間もなく攻寄せらる。或は遠く取巻き、或は近く迫り、其の羽はたきと鳴聲とで鴉を威嚇してゐる。鴉は逃損じた武夫の如く、攻圍軍に攻立てられて、懸命になつて枝に取縋つてゐるばかり、翼をやすめて鳴聲すら立て得ない。

これらの渡鳥は嵐に吹きまくられてか、木の葉に包まれてか、一群又一群とだん／＼都の空から消えて行つてしまふ。さうして十一月の下旬になると、大方其の姿も見かけ

ない。あゝ懸軍長驅、彼等は何處を指して行くのであらう。

彼等の行く所に木の葉は空に飛び、彼等の過ぐる時に嵐は後方から追ひかけて来る。雲に包まれ嵐に打たれても、行くべき方まで行かなければ止まない。一團又一團、群れつ散りつゝ、次第次第に空を掠めて過ぎる。しばし立止つて其の行く方を目送し給へ。海に陸に一隊又一隊、遙かに遠くエルサレムの淨地へ向つて出發した聖十字軍の姿を思ひ浮べずにはゐられない。

Jerusalem. エルサレム
キリストの墓の地



鳥 渡

戸山
東京市牛込區
にある。

ある夕方、戸山が原へ出て、草の深く茂つた丘の上へ登り、入日後の鈍色の雲を眺めてゐた。すると不意にけたまひしい音を立てて、空を鳴きつれて行くものがある。驚いて見上げると、幾百の群鳥が一團となつて、空も黒くなるばかりに群がつて行くのである。それも、私の立つてゐる丘からさまで遠くない空の上であるから、羽音まで明らかに聞えて恐しい位であつたが、ふと氣がつくと、私の立つてゐる叢の中へ、何か空からぼたん**と**落ちたものがある。草をわけて見ると、紅の木の實が一つ落ちてゐた。今過ぎて行つた渡鳥が、何處かの森から啄んで來たものを誤つてこの草原へ落したのかと思ふと、はぐれたる木の實よ、漂泊の鳥の翼に乗つて、何處の森より來りしぞ。といふやうな、何か不思議な感じがした。其の實を拾つて鳥の行く方を見ると、もう其の影は幽かになつて、入日の雲の微かに明るい地平線に没してしまつた。

其の鳥が過ぎた翌日であつた。夕嵐が烈しく起つて、原を吹き、森を吹き、枯草を飛ばし、僅かに残つてゐた木の實をもぎちぎり、雲の中から霰がたはしつて來た。もう秋の終、今日から冬の領土だといふやうに感ぜられた。私は又一人嵐に吹かれながら野路を辿つて行つた。黍殻の束ねたのが吹飛ばされて、唐辛子が赤く畑にさらされてゐた。昨夕の丘へ登つて見たが、唯荒涼灰色の雲が見る／＼空の上にはびこつて來る。

あゝ、愈、冬になつたのか、華やかな夏が寂しい秋に移つて

行く時は、物のくま、日の影などに、それとなく人の心に知られるものであるが、秋が冬にかはる時は、氣をつけてゐないとわからない。渡鳥の最後の一隊、これが即ち秋の殿軍である。昨夕の鳴きつれて過ぎたのも、この冷たい嵐を人に告げ知らせる爲であつた。あゝ殿軍の一隊よ。汝等の過去つた後、世は氷雪の領土となるのである。

冬になつてから、ともすると、一日か二日拾ひものをしたやうな暖い日がある。かやうな日、前庭の南天の赤い實などにはさりと鋭い音を立てて下りるものがある。見ると、それは百舌雀で身のひきしまつた翼の先の切れ尖つた好個の戰士の姿をしてゐる。其の嘴は短く尖つて、眼は爛々として輝き、下りるとまづ四邊を警戒する。これは渡鳥の

はぐれ者である。肉食鳥には、常に戦ふべき敵がある。餌食を求めるにも、まづ敵に意を注がなければならぬ。爛たる其の眼、凜たる其の聲、慄慄の氣は細かい身の内に満ち充ちてゐる。庭前に下りた一羽の百舌雀、汝は落武者である。落武者なればこそ、一層周圍に氣を配る必要がある。恐るゝ南天の葉を動かして、紅の實を啄んでゐるが、忽ち何物にか驚いて、きやあと一聲長く引いて眞直に舞上り、塀を越えて姿は見えなくなつてしまつた。

落武者の身は、何處を指して行くのであらう。(若き自然)

西條八十
明治二十五年、
東京市に生る。
詩人。早稻田
大學講師。

一八 母と蘆 (自習文)

ふるさとの
母をおもへば
片岡の



西條八十肖像

蘆もなつかし

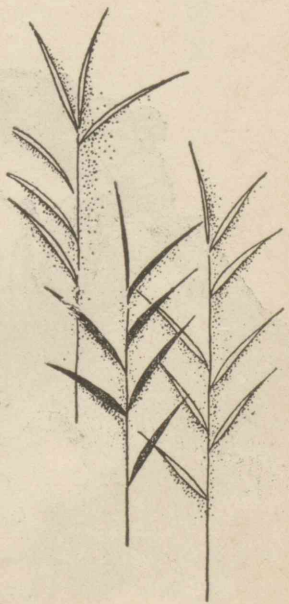
西條八十



さや／＼と
風のわたれば
靡^{なみ}きよる
夕の穂波
わが母の
眉を偲^{しの}ばせ
しめやかに
雨ふる夜半は
そことなき
葉ずれのひゞき
おん母の
聲音にまがふ



ふるさとの
母をおもへば
かの青き
蘆もなつかし



少年時代、私は東京を離れて一年ばかり奈良の古都に近い田舎で暮れたことがある。生れて初めて両親の傍をはなれたので、私は明けても暮れても東京の空を眺めては、あの明るい銀座の街の灯を戀しがつた。

私がゐた家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆が一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子をあけると、すぐ眼の前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色の空が覗いてゐる。折々白

コバルト
美しい碧
色。

葦切
鶯に似て大き
く、蘆原の中
にゐて、蟲を
食ひ、やかま
しく鳴く。ヨ
シハラスマメ
ともいふ。

い雲が流れた。蘆の中では葦切が玉を研るやうな音を立てた。夕ぐれには、何處からともなく次第に黝く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさや／＼わたつてきて、蘆の細い葉をゆるがせた。私がいちばん好きなのは、この夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐることであつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光り翳る蘆の穂波を見てゐると、それが色々に人の眉、鼻口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔附に見えたので、私は懐かしい母の顔を思ひ出した。私はじつと眼をつぶつてその蘆の生えた丘の面いつばいの巨きな白い母の顔を想ひうかべた。さうしてうすら冷たい風の中で、ひとり、

「おかあさん。」

となつかしく涙ぐましく叫ぶのであつた。

またその時分、私は毎晩一里の路をあるいて、奈良の町まで英語を

習ひに行つた。

嫩草山の麓にギンポールといふアメリカ人のお婆

さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中眞黒い服を着て、赤く爛れた兎のやうな眼に大きな眼鏡をかけてゐた。

その人に夕方の六時から七時まで英語の讀方と發音を教はり、それから温かいおいしい紅茶を御馳走されて歸つてくる時分には、もう田圃の中の夜路には、とつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘徑を下つてくる時に、兩がはの蘆の葉のさらさらとそよぐ音は、恰も彼等が内證で、何か囁き合つてゐ



蘆

るやうであつた。時には多數の人がその葉かげに集つて、何かひそひそ話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうしてその聲の中に、殊更聞きおぼえのある懐かしい母の聲が聴きとれたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へ戻つて戸を締めて床に就いてからも、やさしく諄諄と諭すやうな母の聲音が、いつまでも沁々と耳もとに響いてゐるのであつた。

その頃の母戀しさの心を私は「母と蘆」といふ名でこゝに歌つたのである。(詩の味ひ方)

菊池寛
明治二十二年、
高松市に生る。
小説家。

一九 精進勇猛 (その二)

菊池寛



菊池寛肖像

市九郎は山野の別ちなく唯ひた走りに走つた。二十里に餘る道を唯一息に馳せて翌日の夕暮には美濃大垣在に辿り着いてゐた。彼は此處へ來るまで、何處へ泊らうといふあてもなかつた。何人を頼らうといふあてもなかつた。唯妄りに逃走りたかつた。一途に今までの自分の生活から逃れたかつたのである。

彼はふと、大垣在の淨願寺といふ大寺の門前へ出た。殷

總録
總取締。

焦熱地獄
こゝに落ち
人ば、猛火の
燃ゆる室に
投ぜられ、皮
肉はたれぬ
が罪が滅び
なげれば死
いことか出
なぬびる

殷と鳴り響いてゐる暮六つの鐘を聴いた時に、彼の頼りない心は端なくも縋るべき最後のものを見つけたのである。淨願寺は美濃一國眞言宗の總録であつた。市九郎は現在明遍上人に必死の教化を求めて、心からの懺悔をした。上人はさすがにこの極重悪人をも捨てなかつた。市九郎が懺悔をした後に、有司の許へ自首しようといふのを止めて、

「重ねて、悪業を重ねた汝ちやから有司の手によつて身を梟木にかけられ、現世の報を自ら受くるのも罪亡しの一法ぢやが、それでは未來永劫焦熱地獄の苦難は免れぬぞよ。それよりも佛道に歸依し、衆生濟度の爲に身命を捨て、諸人を救ふと共に汝自身を救ふのが肝要ぢや。」

と教化した。

市九郎は上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の火に心を爛たせて、當座に出家の志を堅めた。彼は上人の手によつて得道して、了海と法名を呼ばれ、ひたすら佛道修行に肝膽を砕いた。道心勇猛みゆうの爲だらうか、僅か半年に足らぬ修行に、行ぎやう業は氷霜よりも咬かくなつた。彼は自分の道心が定つても、動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救済の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

享保九年の秋、彼は赤間が關から小倉に渡り、豊前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて、羅漢寺に詣でんものと道を山國川の溪谷に添うて辿つた。かくて淋しい樋田の驛で、晝食の齋さいにありついた後、再び山國谿に添うて南を

享保九年

(二三八四)

徳川吉宗の時

代。

羅漢寺

豊前中津より

四里、下毛郡

上津村字跡に

ある寺。

指した。驛から出外れると、道は又山國川に添うて、火山岩の海岸を傳うて走つてゐた。

歩み難い石高道を、市九郎の了海は杖を頼りに辿つてゐた時、ふと道の傍に、この邊の農夫であらう、四五人の人々が罵ののり騒いでゐるのを見た。了海が近づくと、その中の一人は早くも彼の姿を見つけて、

「御出家様、これはよい所へ來られた。非業ひごふの死を遂げた哀れな亡者ぢや。通りかゝられた縁に、一



山 國 川

遍の回向をして下され。」と頼んだ。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の死骸ではあるまいかと思うた。了海は、自分の過去の悪業を想ひ起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚のすくむのを覺えたが、それは水死した男の死骸であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れてゐるのはどうした仔細ぢや。」

と、了海は恐るゝ聞いた。

「御出家は旅の人だから御存じあるまいが、この川を半町も上れば鎖渡しといふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が悉く難儀する所ぢや。この男はこの川上の柿坂郷に住んでゐる馬士ぢやが、今朝鎖渡しの

途中で馬が狂うた爲、五丈に近い所を眞逆様に落ちて、見られる通りの無慚な最期ぢや。」

と、その中の一人がいつた。

「鎖渡しと申せば、かねゝ難所とは聞いてゐるたが、かやうな憐を見ることはたびゝござるかの。」

と了海は死骸を見守りながら打しめつて聞いた。

「一年に三四人多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に棧が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや。」

と答へながら、百姓達は死體の始末にかゝつた。

了海はこの不幸な遭難者に一遍の經を讀みをへると、足を早めて、その鎖渡しへと急いだ。そこまでは、もう一町と

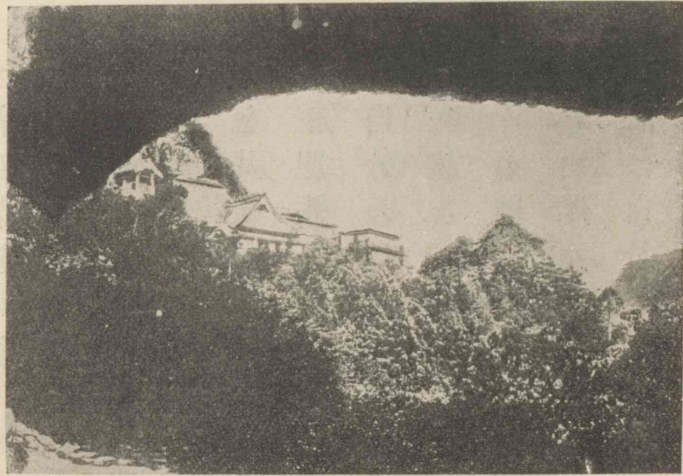
隔つてゐなかつた。見ると、川の左に聳えてゐる荒削りされたやうな山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に斫裁たれて、そこに灰白色のぎざ／＼した巖の多い肌を露出しているのであつた。山國川の水は、その絶壁に吸寄せられたやうに此處に慕ひ寄つて、絶壁の裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて渦巻いてゐる。

里人が鎖渡しといつたのはこれだらうと、了海は思つた。平坦な道はその絶壁に絶たれてしまつて、その中腹を松杉などの丸太を鎖で聯ねた棧道が危げに傳はつてゐる。か弱い婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え心戦くも理であつた。

了海は岩壁に縋りながち、戦く足を踏みしめて、漸く渡り終つてその絶壁を振向いて見た。その刹那であつた、彼の心に咄嗟に或大誓願が勃然と萌したのは。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自然が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふことを祈つてゐた。今、目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨てて、この難所を除かうといふ思ひつきが、旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を剝貫いて、道を通じようといふ不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのも無理ではなかつた。

了海は自分が求め歩いたものが、漸くこゝで見つかつたと思つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年、千年と



羅漢寺

經つ中には、千萬人の命を救ふことが出来ると思つたのである。

かう決心すると、彼は一途に實行に着手した。その日から羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのであるが、何人もこの邊には馴染のないこの風來僧の言葉に耳を傾けなかつた。

「三町をも超える大磐石を刳

貫かうといふ瘋狂人ぢや、は、は、は。」

と、嗤ふものはまだよい方であつた。

「大騙ぢや、針の耳から天をのぞくやうなことをいひまへにして、金を集めようといふ大騙ぢや。」

と、了海の勸説に迫害を加へる者さへあつた。

了海は十日の間徒な勸進に努めたが、何人も耳を傾けぬのを知ると、奮然として獨力この大業に當ることを決心した。彼は石工の持つ鎚と鑿とを手に入れて、この大絶壁の一端に立つた。それは一個のカリカチュアであつた。削り落し易い火山岩であるとはいへ、川を壓して聳え立つ巖、甍たる大絶壁を、了海は自分一人の力で刳貫かうとするのであつた。

カリカチュア
Caricature
誇張漫畫。

「到頭氣が狂つた！」と、行人は了海の姿を指さしながら嗤つた。

しかし了海は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて第一の鎚を下したのであるが、それに應じて唯二三片の碎片が飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつた。が、了海は少しも失望しなかつた。第三、第四、第五と、彼は懸命に鎚を下した。空腹を感じれば近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて鎚を下した。

懈怠の心を生ずれば、眞言を唱へて勇猛の心を振るひ起した。一日・二日・三日、了海の努力は間斷なく續いた。旅人

はその傍を通る度に嘲笑の聲を送つたが、了海の心はその爲にしばらくも撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

やがて了海は雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を建てた。朝は山國川の流が星の光を寫す頃から起出で、夕は瀨鳴りの音が寂靜の天地に澄みかへる頃までも、鎚を振るふ手を止めなかつたが、行路の人々はなほ嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたはけぢや。」

と、了海の努力を眼中に置かなかつた。が、了海は一心不亂に鎚を振るつた。鎚を振るつてゐさへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺し

た悔恨もそこにはなかつた、極樂に生れようといふ欣求もなかつた。唯そこに晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺に身を苦しめた。自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は勇猛の心を振るひ起して、一向專念に鎚を振るつたのである。

(恩讐の彼方に)

二〇 精進勇猛 (その二)

菊池寛

新しい年が來た。春が來て夏が來て、早くも一年が經つた。了海の努力は空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれてゐた。それはほんの小さい洞窟ではあつたが、了海の強い意志は、最初の爪痕を明らか

に止めてゐた。

が、近郷の人々は、まだ了海を嗤つた。

「あれ見られい！ 狂人坊主があれだけ掘りをつた。一年の間もがいてあれだけぢや……。」

と嗤つたが、了海は自分の掘穿つた穴を見ると、涙の出る程嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自分の精進の力の如實にあらはれてゐるものに相違なかつた。又一年が經つた。了海は年を重ねて更に振るひ立つた。夜は如法の闇に、晝はなほ薄暗い洞窟の裡に端坐して、唯右の腕のみを狂氣の如くに振るつてゐた。了海に取つて、右の腕を振るふことのみが、彼の宗教的生活のすべてになつてしまつた。洞窟の外には、日が輝き、月が照り、雨が降り、嵐が荒んだが、

如法の闇
眞の闇。

洞窟の中には、間斷なき鎚の音のみがあつた。

二年の終にも、里人は獨り嗤笑を止めなかつたが、それはもう聲にまでは出て來なかつた。唯了海の姿を見た後、顔を見合はせて互に嗤ふだけであつた。更に一年経つた。了海の鎚の音は、山國川の水聲と同じく不斷に響いてゐた。村の人達はもう何ともいはなかつた。彼等が嗤笑の表情は、何時の間にか驚異のそれに變つてゐた。了海は長い間梳らない爲に、頭髮は何時の間にか伸びて、双肩に掩ひかかり、浴せざれば垢づきて、人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘穿つた洞窟の裡に獸の如くうごめきながら、狂氣の如くその鎚を振るひつゞけてゐたのである。

里人の驚異は、何時の間にか、同情に變り始めてゐた。了

海が暫しの暇を盗んで、托鉢の行脚に出かけようとする、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが多くなつた。了海はその爲に托鉢に費すべき時間を更に絶壁に向ふことが出來た。

四年目の終が來た。了海の掘穿つた洞窟は、最早五丈の深さに達してゐたが、その三町を超える絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は了海の熱心に驚いたものの、まだかくばかり見え透いた徒勞に合力する者は一人もなかつた。了海は唯一人その努力を續けねばならなかつたが、もう掘穿つ仕事に於て三昧に入つてゐた。了海は唯鎚を振るふより外は、何の存念もなかつた。土鼠もぐらのやうに命のある限り掘穿つて行く外には、何の他念もなかつた。

彼は唯一人拮々として掘進んだ。洞窟の外には、春去り秋が来て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の鎚の音のみが響いた。

「可哀さうな坊様ぢや。物に狂つたと見えてあの大磐石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを。」

と、行路の人々は、了海の空しい努力を悲しみ始めたが、一年経ち二年経ち、ちやうど九年目の終に、了海の穿つた穴は、入口より奥まで、二十二間を計るまでに掘進んでゐた。

樋田郷の里人は、始めて了海の事業が可能であるのに氣がついた。一人の瘠せはてた乞食僧が、九年の力でこれまで掘穿ち得るものならば、人を増し歳月を重ねたならば、こ

の大絶壁を穿ち貫くことも、必ずしも不思議なことではないといふ考が、里人等の胸の中に銘せられて來た。九年前、了海の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進につき始めた。數人の石工が、了海の事業を援ける爲に雇はれた。もう了海は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の鎚音は、勇ましく賑やかに洞窟の中から洩れ始めたのである。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、それが未だ絶壁の四分の一にも達してゐないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を増してもとても成就はせぬことぢや。あたらず海どのにたぶらかされていらぬ物入をした。」

と、彼等は涉らぬ工事に何時の間にか厭き始めてゐた。了海は又一人取残されねばならなかつた。彼は自分の傍に、鎚を振るふ者が一人減り二人減り、遂には一人もゐなくなつたのに氣がついたが、彼は決して去る者は追はなかつた。黙々として自分一人その鎚を揮ひ續けて行くのであつた。里人の注意は、全く了海の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれば穿たれるほど、その奥深く鎚を振るふ了海の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は闇の裡に閉された洞窟の中を透かし見ながら、

「了海さんはまだやつてゐるのかなあ。」と疑つたが、さうした注意も、しまひには段々薄れてしまつて、了海の存在は里人の念頭から、屢、消え失せようとしたが、

了海の存在が里人に對して没交渉である如く、里人の存在も亦了海に没交渉であつた。彼には唯眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。

了海は洞窟の中に端坐し始めてから、最早十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續けてゐた爲に、顔色は蒼ざめ、雙の眼は窪んで、肉は落ち骨は露はれ、この世に生ける人の姿とも見えなかつたが、了海の心には、不退轉の勇猛心が、頻に燃え旺つて、唯一念に穿ち進む外には、何物もなかつた。一分でも一寸でも、岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

了海は唯一人取残されたまゝに、また三年を経た。すると何時の間にか、里人達の注意は再び了海の上に歸りかけ

てゐた。彼等がほんの好奇心から洞窟の深さを測つて見ると全長六十五間、川に面する岩壁には採光の窓が一つ穿たれ、最早この大岩石の三分の一は、主として了海の瘡腕によつて貫かれてゐることがわかつた。

彼等は再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を恥ぢた。了海に對する尊崇の心が再び彼等の心に復活した。やがて寄進された十人に近い石工の鎚の音が再び了海のそれに和した。

又一年経つた。一年の月日が経つ中に、里人達は何時かしら、目先の遠い出費を悔い始めてゐた。寄進の人夫は、何時の間にか一人減り二人減つて、おしまひには、了海の鎚の音のみが、洞窟の闇を打顫はしてゐたが、傍に人がゐるても

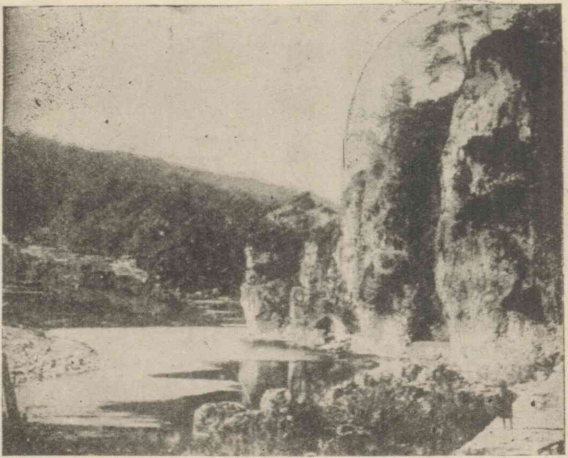
なくとも、了海の鎚の力は變らなかつた。彼は唯機械の如く渾身の力を入れて鎚を擧げ、渾身の力を以てこれを振下した。彼は自分の一身をさへ忘れてゐた。

一年経ち二年経つた。一念の動く所、彼の瘡せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。ちやうど十八年目の終であつた。彼は何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つてゐた。

里人はこの恐しい奇蹟を見ると、最早了海の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は前二回の懈怠を心から恥ぢ、七郷の人々が合力の誠を盡くして、擧つて了海を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が巡視して、了海に對して賞美の言葉を下した。近郷近在から三十人に近い石工が蒐められた。工事は枯葉を焼く火のやうに進んだ。

中津
大分縣にある
町。

人々は衰殘の姿痛々しい了海に、「最早そなたは、石工共の統領をなさりませ。自ら鎚を振るふには及びませぬ。」と勧めたが、了海は頑として應じなかつた。彼は殫れば鎚を持つたたまゝ、殫れたいと思つてゐるらしかつた。彼は三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ、懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。しかし人々が了海に休息を勧めたのも無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いてゐた。僅かの歩行にも、杖に縋らねばならなかつた。その上、長い間闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、又不斷に彼の身邊に飛散る石の碎片が、その眼を傷つけ



青生洞の門

たためでもあらう、彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあ
 いろも辨へかねるやうになつてゐた。

さすがに不退轉の了海にも、身に迫る老衰を傷む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中途にして殫れることを、何よりも無念と思つたからであつた。「もう二年の辛抱ぢや。」と、彼は心の裡に叫んで

身の老衰を忘れようと、懸命に鎚を振るふのであつた。
 冒し難き大自然の威嚴を示して、了海の前に立塞がつて

ゐた岩壁は、何時の間にか、衰残の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命あるものの如く、一路その核心を貫かんとしてゐるのであつた。（恩讐の彼方に）

二一 冬枯の大井川

千葉龜雄

千葉龜雄
明治十一年、
山形縣に生る。
大阪毎日新聞
社學藝部長。
島田
静岡縣志太郡、
大井川の東岸。
金谷
静岡縣榛原郡、
大井川の西岸。



像 曾 雄 龜 葉 千

東海道島田の驛はこゝに盡きた。「この川一つを向ふへ渡れば、そこがすぐ金谷の町だ。」といふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。飽くまではしやぎきつた初冬の空は、底も知れぬほどに凝つて蒼く、見るとも寒げに、高くく澄んでゐる。白い雲が、時々ぼつちり浮

んでは、また一たまりもなく吹流される。風のないだ大海に、白い帆影が現れては、またすべつて行くとも思はれる。日影は小春日のやうに暖いが、風は飽くまで冷たく、骨を刺す。岸の川柳の葉が半ば枯れて、ほろ／＼と水にこぼれる。肩をすぼめて、俯向いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢のやうにひよい／＼と飛んで出ては、つんざくやうな細い聲で、ひい／＼と啼いて行く。「冬が來た宿がなくなつた。」と泣くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍富士と押並んで、東海隨一の大河と呼ばれたこの大井川も、今は瀬が涸れ、水が落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、一面のセピヤ色に眼前に展開されてゐる。見わたす河上も河下も皆川原である。石といつても、幾百年となく激流

Sepia
セピヤ
汁 烏賊の墨

に洗はれて、握飯のやうに圓くなつて、灰色に晒されたごろた石だ。その灰茶色が石原の中を、幾つにも割つてちろちろと白く動くのは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて青く緑に閃き、小石を噛み、大石を噛んで、瀬枕立てて滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでも来るやうに響く外には、河の兩岸のこの眞晝(眞晝)を寂として鍛冶屋の錘音一つ響かない。若し夢に形があらば、この静寂が即ち夢の形であらう。若し夢に聲があらば、この流の聲が即ち夢の聲であらう。水は滔々として百年、二百年の夢を見て、夢のやうに流れてゐる。岸に立つ人亦恍としていつしか二百年、三百年の昔の夢を繰返さざるを得ない。

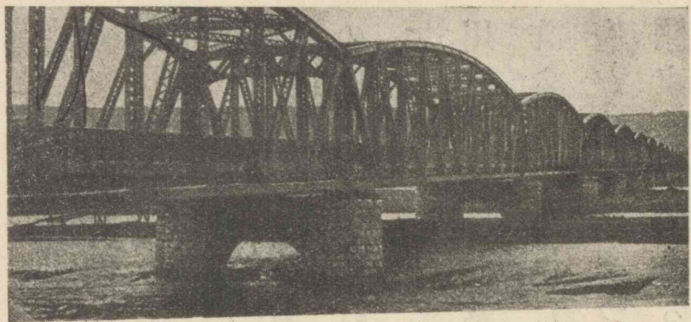
「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」

どことなく長閑な馬の鈴が、ちやらん／＼と鳴つて、空にも入れ、地にも徹れと、清しい馬子唄の聲が夢に入る。あゝ富士といはず、天龍といはず、一葉の船、一本の棹で越されぬ河流がどこにあらうか。獨り大井川だけが、船で越すことを許されなかつた。徳川幕府が江戸に移つて、始めて關東を經營すると共に、大井川を東海一の要害と見



(筆重廣)川井大の昔

と鳴つて、空



た。若し船で上流に溯り、下つてこの河の形勢を見極めるものがあれば、天下の守は悉くこれから破れる。乃ち令して川越を行はせたと土地の歴史に精しい人は説く。今かくて裸一貫の荒くれものは川越人の足の名をもつて、東海道唯一の名物となつた。さしも鬼を取挫ぐ剛情武士も、その背に負はれては、川の音も出ず、島田金谷の全盛目を驚かしたのも今は昔だ。汽車で通つてしまふ今日では、寝てこそ渡れ、大井川、その大井川の冬枯の岸に、今初冬の自光を満身に浴びて立てば、盡き

せぬ流の聲も、無意味に聞くことは出来ぬ。石に碎けて咽ぶのは、昔の全盛を聞け。と語るのではないか。今の寂しさに泣いてゐるのではないか。私はゆうべ日が暮れてから島田の驛に降りた。降りる人は僅かに一人二人。狭いプラットホームを潜つて驛を出ても、人力車一つあるではない。風が海のやうに吼えてゐた。寂然として眠つた山々の影が、くつきりとくぎつた空線の上に、満天の星の光がさえて、ふるくと震へてゐた。舊式な懸行燈の火影をたよりに、鞆を抱へて舊驛の一夜の宿を探した私は、今更に島田の宿の衰顔を泣かざるを得なかつた。

二二 長井川大橋

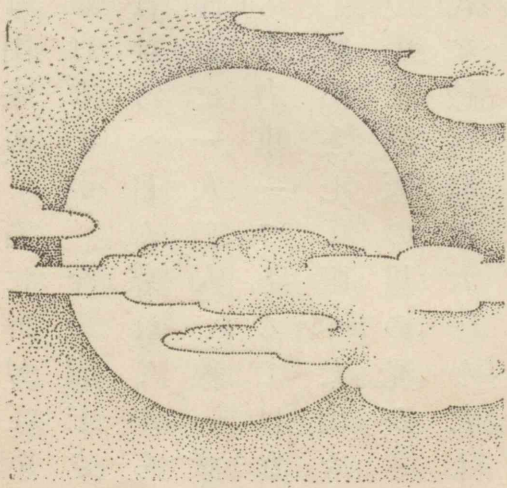
野口雨情
名は英吉。明治十五年、茨城縣に生る。民謡作家、童謡作家。

二二 現代詩大觀 (その四)

十五夜お月さん (童謡)

野口雨情

十五夜お月さん
御機嫌さん
婆やお暇とりました
十五夜お月さん
妹は
田舎へもらはれてゆきました
十五夜お月さん 母さんに



も一度
わたしは逢ひたいな

豊作 唄 (童謡)

野口雨情

山椒さんしよの木で
雀が啼いた

足で 山椒踏んで
山椒の木で啼いた
豆も 小豆も
莢からはしる
麥も 小麥も



河井醉茗
名は又平。明
治七年、堺市
に生る。詩人。

みなたれさがる

山椒 山椒の木で

雀が啼いた

山椒 山椒踏んで

山椒の木で啼いた

山の歡喜

あらゆる山が喜んでゐる

あらゆる山が語つてゐる

あらゆる山が足踏して



河井醉茗

舞ふ踊る

あちら向く山と

こちら向く山と

合つたり

離れたり

出てくる山と

かくれる山と

低くなつたり

高くなつたり

家族のやうに親しい山と

他人のやうに疎い山と

遠くなり



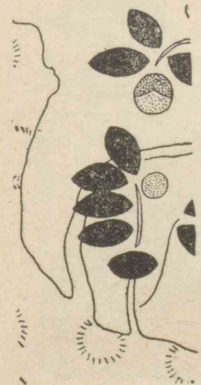
近くなり
 あらゆる山が
 山の日に歡喜し
 山の愛にうなづき
 今や
 山のかゞやきは
 空いつぱいに擴がつてゐる

紅 椿

山越えて來たふるさと
 の家の籬にたゞ一つ
 紅の椿が咲いてゐる

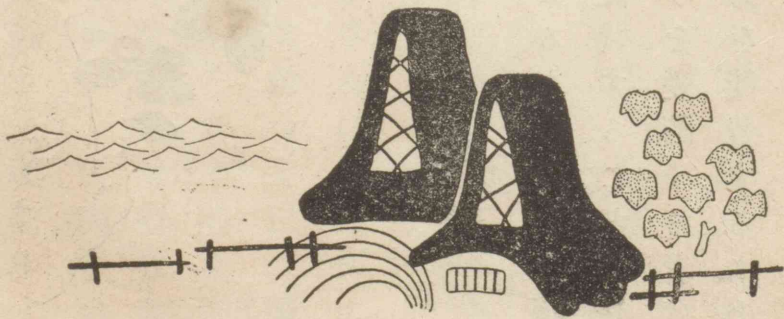


三木露風



三木露風
 名は操。明治
 二十二年、兵
 庫縣に生る。
 詩人。

あゝ紅椿 紅椿
 ありし昔をそのまゝに
 夢ともならで咲く花よ
 昨日吹いた西風は
 遠い響となつて消え
 今日うらゝかな海の町
 あゝ西風の止んだやう
 わが悲しみも過去つて
 ひとりししみぐ海を見る



ふるさとのふるさとの
家の籬の紅椿
その葉を越して
海を見る



佐々醒雪

名は政一。京
都の人。國文
學者。文學博
士。大正六年
歿す。年四十
六。

Emerson
(1803-1882)

米國の
哲學者。

二三 讀書の選擇

佐々醒雪

エマーソン曰く「書を讀まば、最も適當なるもののみを讀
むべし。」さらぬ群書の涉獵に、記憶力を徒費すること勿れ。
と。かの新聞雜誌と拙劣なる小説とのみを愛讀する者は、
エマーソンの所謂劣等なる群書に記憶力を徒費するもの」



佐々醒雪肖像

なり。否、彼等にして、かゝる劣等なる讀書の間に歲月を涉
りて、毫も良好なる讀書に趣味を求むることを勉めずんば、
そは常に時間と記憶力との徒費のみにあらず。かゝる讀
書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發
を妨げ、神餒る氣沮みて、人をして頽然
として生氣なきに至らしむべし。
これを覺醒せんとするには如何に
すべき。エマーソン又教へて曰く「讀
書の最良法は、かの時間と紙とを以て製作したるものを措
いて、直に天然を讀むにあり。」と。然り、誠に汝の趣味の睡眠
を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄てて、名山・大川
の間に、直に秀麗なる天然の文學に接せよ、親しく偉大なる

審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは汝が趣味を覺醒せしむ
ることを得んか。

偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところ
は天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作
に親炙するは、恰も名山・大川の間を逍遙するに似たり。さ
れば善良なる讀書はよく眠れる趣味識を警醒し、よくこれ
を啓發し、助成し、清新なる思想斬新なる筆力を涵養するも
のなり。予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急
務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜん」とす。

苟も書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを選ぶべ
きこと勿論なり。されども最も優等なる書、即ち第一流の
書は、天下そもく幾何かある。今單に日本の文學書につ



筆郎五山遠

(三二) 擇選の書讀

いていはば、萬葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強
ひて二三を數ふるを得とも、一國の文學界の讀書をこの僅
少なる書冊に限らんことは、殆どなし得べきにあらじ。否
かくのごときは、實に予等が偏狹固陋として忌むところな
り。

今この偏狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に專らな
ることを得んとせば、當に如何にかすべき。かのエマーソ
ンは實行し得べき方法なりと稱して左の三則を示しぬ。
先づ曰く、「二年を経ざる著作は讀むこと勿れ」と。蓋し一
年を経て猶社會に忘れられざるものは、或は多少の趣味あ
るものならん。一年をだに經ずして、反古として投棄せら
るゝものは、恐らくは一讀の價值なきものならん。歲月の

(蘭学楷物)

淘汰を待たずして、徒に争うて新出版物を讀まんに、徒勞と
 時間とを賭して文學通の虛名を博し得んのみ。
 又曰く、有名ならぬものは讀むこと勿れ。こは徒に所
 謂珍本に蟻集することなからんことを教ふるなり。そも
 そも名聲とは多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その
 多數の鑑賞に反して、ある機會のために纔かに散佚を免れ
 たる古書を殊更に熟讀せんは、殆ど痴に類せずや。さる疑
 はしき勞力を費さんよりは、まづ有名なるものを讀みつく
 せ。予等の眼前には、半生を讀書に費すとも、猶熟讀玩味す
 る能はざるべき、許多の有名なる著作あるにあらずや。
 又曰く、嗜好に適せざるものは讀むこと勿れ。極めて
 野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面に於ても我

等の知るところなれども、前述の二條件に適したる範圍に
 於て、その嗜好するところを求めば、蓋し大過なきを得んか。
 更にこの條件を敷衍して、再度以上讀破することを欲せざ
 る書は讀むこと勿れ。とさへ説ける人あり。試に思へ、現時
 の讀書界がよく再讀玩味したる新出版物、そも幾何かある。
 讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて没趣味の中
 に投ぜんとす、歎ぜざるべけんや。故におもへらく、以上の
 三則は、讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。

二四 戦争と天氣

藤原 咲平

千九百十七年(大正六年)十月十九日、十一隻のツエツベ

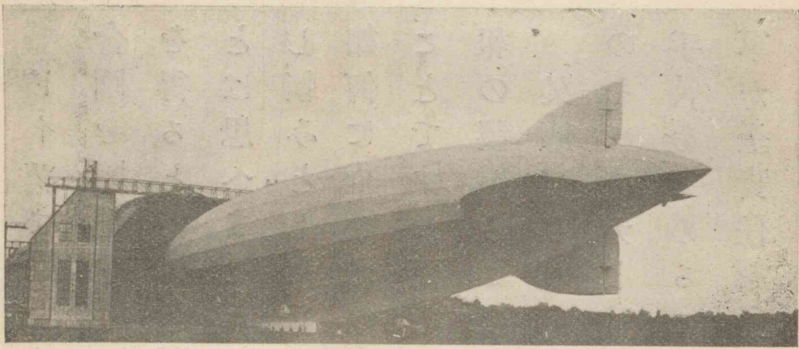
藤原咲平
 中央氣象臺技
 師。理學博士。
 ツエツベリン
 飛行船
 獨逸ツエ
 ッペリン
 伯爵の研
 究に於ける
 飛行船なる
 Zeppelin

マンチエスタ
イギリス
の西岸リ
バリーに
工業都市
シチー
City. 商業繁華
な街。



藤原平吹肖像

ン飛行船は夜にまぎれてロンドン・マンチエスタその他
の英國の都市を襲ひました。その中九隻がロンドンに達
し、一隻はシチーの眞上を通りました。當時ロンドンには
空中防禦の準備少く、何等の抵抗もな
し得なかつたので、かなりの損害を與
へられました。
ところが、この飛行船は、歸航する時、
風の變つたことに氣が付きませんでした。
した。出發の際の豫報では、この時上層では北又は北西風、
毎秒五米内外といふ見込でしたが、英國の南西海上に、ドイ
ツ氣象家の氣づかなかつた低氣壓が現れた爲に、實際は上
空で毎秒北二十米の風が吹きました。その爲に船隊は、翌



ツエツリ飛行船

朝オランダの上空位と思ふ所へさし
かゝり、雲霧で下界が明らかでないの
で、これを見定めるために低空に降り
ましたのに、非常に南に流されました。
それが佛國陣地の上であつたからた
まりません。忽ち打落されるもの、南
に逃げて海上に墜落したもの、まごつ
いて自爆するもの、機を失してとりこ
にされたもの等、四隻の運命は知られ
ましたが、その他は行方不明になつた
りして無事歸還したのは幾隻もあり
ませんでした。

キツチナー
Kitchener.
(1850—1916)
官。總國當歐洲戰
帥陸時軍の英爭
司令

ドイツは、海上は英國に委せても空中に威を振るつて聯
合國を壓迫することが出來れば、戦争はどうあつても勝利
を得るといふ希望に燃えてゐました。この考は決して誤
とは思へません。然るに、ドイツ人は一朝にしてその誇と
し、頼みとしたツエツペリン船隊の敗亡を見たのですから、
如何に全國民の意氣を銷沈せしめたかは想像に餘りある
ことです。而してその失敗の原因は敵の力でなく、天氣豫
報の誤からこのやうなことにたちいたつたのであります。
又傳へらるゝところによれば、一九一六年六月五日英國
のキツチナー元帥は、海を越えて露國に赴き、ドイツ挾撃の
手筈をきめることになりました。その渡航については、海
軍が全責任を負ふこととなり、海軍參謀は商議の結果、北東

オークニー群
島
Orkney Islands.
スコット
ランドの
すぐ北に
ある諸島

風が強いからスコットランドの島陰を北に出で、オークニ
ー群島の西を進むことにしたのださうです。ところが出
帆後一時間とたゞない中に、低氣壓の中心が東に通過し、風
は北西に變つてまともに吹附けて來ましたから、保護の爲
に附隨した二隻の驅逐艦も分離して廻航するの止むなき
に到り、本船は敷設水雷に觸れ、十五分間で沈没し、生存者僅
かに十二名、元帥も空しく北海の藻屑と消えたのです。
その頃英國の氣象臺は、未だ海軍の信用が薄かつたとい
ふ話ですが、この時の低氣壓の如きは最も單純なもので、少
し氣象の常識と經驗のある者なれば、必ず誤なく経過を豫
報し得る筈のものでした。天候についての海員の自負の
爲に、あたら元帥を失つたのであります。天氣豫報だとして

馬鹿にはなりません、それが非常時においては國家の存亡に關するものさへあるのですから。

三國志

晋の陳壽の撰。魏・吳・蜀三國の歴史を記した書。

曹操 魏の主。

これを歴史に徴しても、その事例は多々あります。わが元寇の役の如きは、その最も著しい一例であります。又三國志で御承知の赤壁の戦の如きも、全く氣象學的の戦争であります。初め曹操は八十萬の大軍を率ゐ、荊州を破り、江陵を陥れ、大江に臨んで吳を壓しました。北兵は水に慣れず、大江を渡ることが出来ませんので、茲に兵船を鎖でつなぎ、いはゆる連環として風波にも潮の干満にも動搖を少くしたのです。魏の謀將は兵船を連環すると、火攻にあへば防禦の途がないと恐れましたが、時しも冬の半ばで季節風が卓越し、北西風のみ吹いてゐましたので、曹操は東南風さ

へなければ如何なる敵と雖も、火攻を施す術がなからうと論じて謀將等を服せしめました。曹操は北國の産で、この邊の氣候にさまで通曉するわけには参りません。

周瑜 吳の將。

赤壁 湖北省武昌府の近傍。

漢口 湖北省にある。

ところが、圖らずも東南の風が起りました。東南方は即ち吳の陣です。周瑜はかねてこの風の起るべきを知り、手ぐすねひいて待つてゐたのですから、風の起るとともに風に從つて火船を放ち、かの赤壁の奇勝を博したのです。世に孔明が七星壇に風を祈つたと傳へます。今日私どもは、毎日漢口から氣象電報を得て豫報に便して居りますが、冬の間は北西風のみ吹續くを常と致しますが、稀に低氣壓が起ると風が東南に變ります。孔明が南屏山に風を祈つたことの眞偽は私の知るところではありません。まさか孔

ナポレオン

Napoleon Bonaparte.
(1769-1821)
フランスの皇帝。

モスクワ

Moskva.
ロシア中央地方の都。

明や周瑜は、今日の低気圧なる知識は持たなかつたでせうが、固より南國に成長し、この北西の季節風の季中にも、臨時に東南風の起り得ることを知つてゐたに相違ありません。とにかく赤壁の大戦は、氣象學の知識によつて勝敗が決せられたものと考へられます。又かのナポレオンのロシア遠征の失敗の如きも最も有名な一例であります。初めナポレオンは出征に際し、ロシアの冬についてたづねましたところ、統計によればなほ大して寒くはなるまいといふ答でした。ところが、その年は例年のない寒さで、モスクワは焼かれ、殊に大雪にあつて散散な失敗を招きました。つまり戦に負けたのでなく、天候に負けたのです。ナポレオンの過でなく統計によつて氣

候を豫知しようとした爲の過です。

統計による豫報は、何回も繰返す場合には必ずそれ相應の成績を平均上擧げることが出來ますが、一回々々の勝負においては、必ず的中するとは申されません。それが國運を賭する戦争の場合などでは、若しその豫報がはづれたら、取返しのかぬことになります。(雲を擱む話)

二五 現代俳句大觀 (その二)

大谷句佛

若竹の伸びるを上る蝸牛

口あいて落花ながむる子は佛

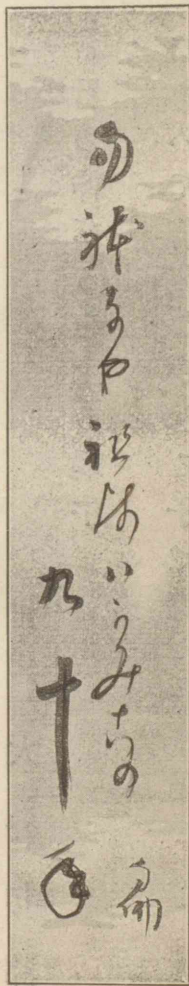
大谷句佛

名は光演。明治八年、京都に生る。東本願寺前門跡。俳人。

勿體なや祖師
はかみこの九
十年 句佛

大谷繞石

名は正信。明
治八年、島根
縣に生る。廣
島高等學校教
授。俳人。



蹟筆佛句谷大

川を挟んで樓々の灯や春の雪
月天心身に影浴びて梅に立つ

大谷繞石

河東碧梧桐

名は兼五郎。
明治五年、愛
媛縣に生る。
俳人。俳壇に
新傾向句を唱
道した。

河東碧梧桐

コスモスの二葉を雑草とぬき捨ててゐた
藪の音と月あかり蒲團展ぶる時
倉光り緋燃ゆる花鳴く雲雀

雲雀水のむ艸
青々しかりけ
り 碧



蹟筆桐梧碧東河

内藤鳴雪

名は素行。愛
媛縣の人。俳
人。大正十五
年歿す、年七
十九。

内藤鳴雪

元日や一系の天子富士の山
我が國のものところ思へ初日影

三軒家蚊帳釣
る時のほさ、
さす 虚子



蹟筆子虚濱高

高濱虚子

名は清。明治
七年、松山市
に生る。俳人。
「ホトトギス」
主宰。

高濱虚子

梅三株漁村を守る社かな
初雷や籠の鶉のくゝと鳴く

松瀬青々
名は彌三郎。
大阪市の人。
俳人。大阪朝
日新聞記者。

海光まんく
と船路一筋誤
たす 井泉水

萩原井泉水
名は藤吉。明
治十七年、東
京市に生る。
俳人。

東海に此の國ありて初日の出
耽り讀む眼を鶯に放ちけり

蹟筆水泉井原萩

萩原井泉水

蜻蛉すい〜夕焼流る水流る

山の宿屋は軒のポストに月さしてゐる

新撰 女子國文 卷四 終

日本文學年表

明治・大正・昭和時代

作者	生年	歿年	作品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
河竹默阿彌	一文三	明治二六	默阿彌脚本集		
假名垣魯文	一文二	明治二七	西洋道中膝栗毛		
海上胤平	元天保	大正五	椎園集		(六ノ一九)明治前期和歌大觀
中村正直	三天保	明治二四	西國立志編、自助論		(一ノ二五)否の一語
小出 粲	四天保	明治四一	世界國盡、西洋事情、 學問の勸め、文字の教		(六ノ一九)明治前期和歌大觀
福澤諭吉	五天保	明治三四	正風歌集		(六ノ一四)税所教子刀自の棺前 に誄、(六ノ一九)明治前期和歌大觀
本居 豊	天保二	大正二	幕府衰亡論、山縣大貳、春日局		(一ノ三)歌話 (六ノ七)現代詩大觀(桶狭間)
高崎 正風	七天保	明治四五	秋香歌がたり、秋香歌集		(四ノ二五)現代俳句大觀
福地 櫻痴	一天保	明治三九	吉野拾遺詳解		
中村 秋香	一天保	明治四三	鳴雪俳句抄、鳴雪俳話		
内藤 鳴雪	弘化四	大正一五			

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
外山正一	元嘉永	明治三	漢字破、抜刀隊、可兒大尉、忘れがたみ		(六ノ二)繪馬
末廣鐵腸	元嘉永	明治九	雪中梅、花間鶯		(六ノ二)繪馬
矢野龍溪	三嘉永		佳人の奇遇		(六ノ二)繪馬
柴庭篁村	五嘉永	一大正	挿出し物、むら竹、當世商人氣質		(六ノ二)京都の春
大和田建樹	四安政	一大正	明治唱歌、謠曲通解、雪月花		(六ノ二)明治前期和歌大觀
税所敦子	四安政	四明治	御垣の小草		(六ノ二)現代俳句大觀
角田竹冷	四安政	四明治	俳諧本大全		(六ノ二)現代俳句大觀
坪内逍遙	六安政		桐一葉、法難、新曲浦島、小説神髓、當世書生氣質		(六ノ二)現代詩大觀
三宅雪嶺	元萬延	一大正	宇宙、世の中、想痕		(六ノ二)長柄堤の訣別
萩野由之	元萬延	一大正	大日本通史、文話と史話		(五ノ二)元寇論
岸上操	元萬延	四明治	和漢婦女龜鑑、紀行文集		(二ノ三)聖德太子、(一〇ノ二)清少納言の意氣
森鷗外	元萬延	一大正	舞姫、水沫集、即興詩人、泪滴、うた日記、審美綱要		(五ノ三)春日局
廣津柳浪	元文久	三昭和	殘菊、河内屋、黒蜥蜴		(五ノ二)安井夫人

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
落合直文	元文久	明治六	こまばの泉、孝女白菊の歌		(二ノ一)六)ヒエールとマリブラ
池邊義象	元文久	一大正	日本制度通、世界讀本		(六ノ一)現代和歌大觀
黒岩涙香	二元文久	九大正	噫無情、巖窟王、天人論		(六ノ一)現代和歌大觀
徳富蘇峯	三元文久		吉田松陰、國民叢書、大正の青年と帝國の前途、近世日本國民史		(六ノ一)現代和歌大觀
村井弦齋	三元文久	二昭和	小れこ、日の出島、食道樂		(六ノ二)同胞兄弟
長谷川二葉亭	元治	四明治	浮雲、その面影、平凡		(六ノ一)明治天皇
伊藤佐千夫	元治	二大正	伊藤左千夫全集		(五ノ四)大ころ、(六ノ六)猿人日記
正岡子規	二慶應	明三	俳人蘇村、賴祭書屋俳話、子規隨筆		(五ノ九)六代松、(六ノ一八)現代和歌大觀
夏目漱石	三慶應	明三	吾輩は猫である、草枕、虞美人草、三四郎、行人、明暗		(二ノ一)五)箱根路、(五ノ一)三)初夏の木曾路、(五ノ二)子規俳句、(五ノ二)俳句評釋、(六ノ一)八)現代和歌大觀
尾崎紅葉	三慶應	明三	伽羅枕、夏小袖、金色夜叉		(二ノ三)文鳥、(二ノ二)元)子規の靈に、(三ノ九)保津川下り、(五ノ二)吾輩は猫である、(七ノ一)山路代俳句大觀
幸田露伴	三慶應	明三	露園々、風流佛、五重塔、天打つ波、潮待草、努力論		(六ノ三)五重塔、(七ノ九)山のもの
芳賀矢一	三慶應	二昭和	月雪花、國文學歴史代選、國民性十論、國文學史十講		(二ノ一)櫻、(二ノ二)愛國婦人會、(二ノ二)五)國歌と國旗、(三ノ二)忠君愛國、(八ノ五)我が國各時代の代表的婦人、(一〇ノ二)平安朝の文學
北村透谷	元明治	二明治	蝶のゆくへ、蓬萊の曲、秋窓雜記	明治元年、太政官日誌、江湖新聞、藻しほ草、出づ。橘曙覽・大隈言道歿す。	(六ノ一)〇)秋窓雜記
徳富蘆花	元明治	二昭和	自然と人生、死の蔭に、不如歸、黒潮、思出の記、み、すのたはごこ、日本から日本へ		(一ノ七)わが故郷、(三ノ一)八)春の暮、(五ノ一)七)宇宙の富

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
金子元臣	明治元	明治元	古今集評釋、和漢朗詠集評釋、枕草子評釋		(七ノ一四)川柳點 (一〇ノ二八)清文評釋
鹽井雨江	明治元	明治元	湖上の美人、暗香疎影		(七ノ二一)運月尼
川上眉山	明治二	明治四	ふさころ日記、黃菊白花、希望	明治二年、宮中御歌會復興、福澤諭吉の世界圖畫、西洋事情出づ。	(五ノ三二)ふさころ日記 (五ノ一六)鼠日記、(七ノ二〇)吉野のにほひ、(八ノ六)百花譜
大町桂月	明治二	明治一四	關東の山水、八犬傳物語、學生訓		(四ノ一三)現代和歌大觀
石樽千亦	明治二	明治一四	潮鳴、鷗		(四ノ一四)大統領の謁見、(六ノ二七)現代俳句大觀
巖谷小波	明治三	明治三	日本お伽噺、日本昔噺、世界お伽噺、洋行土産		(六ノ二七)現代俳句大觀
大野洒竹	明治三	明治三	國文學全史(平安朝篇)、近世繪畫史、國文學史講話	明治三年、中村正直の西國立志篇、假名垣魯文の西洋道中膝栗毛出づ。	(五ノ二七)自然の愛、(七ノ一三)江戸時代の文學、(八ノ八)與謝蕪村、(九ノ二七)鎌倉室町時代の文學、(九ノ三)歌人西行、(一〇ノ一五)平安京、(五ノ二八)樹下漫筆
藤岡作太郎	明治三	明治三	泰西名著集、孤蝶隨筆		(五ノ二三)高館、(六ノ二七)現代俳句大觀、(一〇ノ一四)雨の思出
馬場孤蝶	明治三	明治三	元祿時代粧、時代と人物、支那文學史、八幡船		(二ノ一五)革の財布
三田村鳶魚	明治三	明治三	公方様の話、江戸の噺、鳶魚隨筆		(一〇ノ一)シエクスピヤの墓に詣つ
島村抱月	明治四	明治七	新美辭學、近代文藝の研究		(六ノ四)平家の都落、(八ノ一七)シヤンダルク、(九ノ七)世界の四聖、(一〇ノ一二)月夜の美感
高山樗牛	明治二	明治三	瀧口入道、時代精神論、日蓮論		(五ノ五)武藏野
國木田獨步	明治四	明治一	武藏野、牛肉と馬鈴薯、運命論者		

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
田山花袋	明治四	明治四	日光山の奥、ふるさこ、蒲團、近代の小説、温泉めぐり	明治五年、東京日々新聞、郵便報知新聞發刊、福澤諭吉の學問の勸め出づ。	(二ノ一四)南公の遺跡、五ノ一(一)安乗の燈臺
土井晚翠	明治四	明治四	天地有情、晚鐘、東海遊子吟		(五ノ一八)現代詩大觀(女性の力、九ノ九)詩一篇
島崎藤村	明治五	明治五	藤村詩集、破戒、春、家、エトランセ、新生、富士		(二ノ二九)文章雜誌、(五ノ一八)現代詩大觀(曉の誕生)、(九ノ九)詩一篇(晩春の別離)
佐々政一	明治五	明治六	近世國文學史、俗曲評釋		(四ノ三)讀書の選擇、(六ノ二七)現代俳句大觀、(八ノ三)日本趣味
樋口一葉	明治五	明治二	瀧江、たけくらべ、われから		(六ノ九)月の夜
佐々木信綱	明治五	明治二	日本歌學史、和歌史の研究、萬葉集選釋、和歌名所めぐり		(四ノ一三)現代和歌大觀、(一〇ノ二九)あ、大正天皇
河東碧梧桐	明治五	明治五	日本俳句抄、三千里、續三千里		(四ノ二五)現代俳句大觀(その一)
武島羽衣	明治五	明治五	修辭學、新撰詠歌法、新井白石、新しき天然		(五ノ一八)現代詩大觀(心のまゝになるならば)
岡本綺堂	明治五	明治五	綺堂脚本集、綺堂脚本十種		(三ノ七)小田原陣
綱島梁川	明治六	明治四〇	梁川文集、病間録、回光録、寸光録	明治六年、森有禮等明六社を起す。福澤諭吉の文學の教へ出づ。	(六ノ八)車上半日記
與謝野寬	明治六	明治六	東西南北、天地玄黃、櫛の葉		(六ノ一八)現代和歌大觀
泉鏡花	明治六	明治六	夜行巡査、外科室、高野聖		(六ノ一一)傘
姉崎嘲風	明治六	明治六	停雲集、花つみ日記現代佛と現身佛		(一ノ二三)汝の母
高濱虛子	明治七	明治七	風流織法、俳諧師、朝鮮		(四ノ三)現代俳句大觀、(八ノ一六)佛法僧、(九ノ二九)嫁ぎ行く娘に贈るこぼし
上田敏	明治七	明治五	みをつくし、詩聖ダンテ、海潮音、牧羊神	明治七年、讀賣新聞發刊、ローマ字採用論出づ。	(六ノ七)現代詩大觀(汽車に乗りて)、(九ノ三一)世界の歌枕

作者	生年	歿年	作品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
上司小劔	明治七		木像、東京、鱧の皮		(四ノ八)能因法師
河井醉茗	明治七		彌生集、高海波、塔影、醉茗詩集		(四ノ三)現代詩大観(山の歡喜)
五十嵐力	明治七		新文章講話、甲島園隨筆、國歌の胎生及び發達		(三ノ四)田園生活、(五ノ二)睡蓮、(六ノ二)明治の文學と明治以前の文學、(七ノ二)紫式部論、(二〇ノ三)古文學に見えた祖先の面影
野口米次郎	明治八		日本詩歌論、歐洲文壇印象記、野口米次郎詩論、神祕の日本	明治八年、太田垣蓮月歿す。	(七ノ一七)雨
大谷繞石	明治八		案山子日記、落椿、虫の文學		(四ノ二五)現代俳句大観
小栗風葉	明治八		青春、風葉集		(五ノ一四)渡守
大谷句佛	明治八				(四ノ二五)現代俳句大観
近松秋江	明治九		秋江隨筆、煙霞、都會と田園		(一ノ三)春のあした、(四ノ一三)現代和歌大観
尾上柴舟	明治九		靜夜、永日、朝ぐもり、日本文學新史、古今と新古今		(四ノ一三)現代和歌大観、(九ノ一八)民話の話
蒲原有明	明治九		草わかば、獨絃哀歌、春鳥集、有明集		(四ノ一三)現代和歌大観
長谷川天溪	明治九		文藝觀、アリストートル、歐洲文藝思潮		(四ノ一三)現代和歌大観
太田水穂	明治九		つゆ草、山上湖上、短歌立言		(四ノ一三)現代和歌大観
島木赤彦	明治九		切火、水魚、赤彦童謡集、太虛集		(四ノ一三)現代和歌大観
金子薫園	明治一〇		金子薫園集、靜まれる樹、歌の作り方		(四ノ一三)現代和歌大観

作者	生年	歿年	作品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
中村吉藏	明治一〇		無花果、井伊大老の死、大鹽平八郎、イブセン評傳、劇場と戲評		(三ノ二二)劍難
窪田空穂	明治一〇		空穂歌集、濁れる川、爐邊鳥聲集、村の葉、土を眺めて		(四ノ一三)現代和歌大観
薄田泣菫	明治一〇		菫笛集、ゆく春、落葉、白羊宮、茶話、春は太陽の香がする		(二ノ九)鐵眼和尚、(一ノ二四)茶話、(三ノ一六)賣子娘、(五ノ二〇)ボアラ
沼波瓊音	明治一〇		蕉風、俳句講話、俳句研究、瓊音句集、高原の風、芭蕉の臨終、凡人に聽け、凱旋、生れ出づる惱、惜しみなく愛は奪ふ、小さき者		(二ノ二〇)早くおしなさいよ、(四ノ九)蟲の聲、(六ノ二七)現代俳句大観
有島武郎	明治一〇		亂れ髪、佐保姫、春泥集、旅の歌		(二ノ一八)お日様の船出、(三ノ二五)現代女流歌人の和歌、(四ノ七)現代詩大観(眞珠貝)
與謝野晶子	明治一〇		二階の窓、五月幟、深淵、正宗白鳥集		(五ノ六)土、(六ノ一八)現代和歌大観
正宗白鳥	明治一〇		土、長塚節歌集		(四ノ二一)冬枯の大井川、(一〇ノ三三)明治の文學、(一〇ノ三三)大正の文學
長塚節	明治一〇		いざさらば、日本仇討物語		(六ノ二八)春が来た、(七ノ一〇)觀潮樓
千葉龜雄	明治一〇		あめりか物語、ふらんす物語、牡丹の客、すみだ川、秋のわかれ	明治十二年、大阪朝日新聞發刊	(四ノ一〇)一樹の蔭
永井荷風	明治一〇		たのもしき婦人、椎葉集、椎の下草		(二ノ一〇)赤城山の大沼、(三ノ三)波に咲く花、(四ノ一七)渡鳥
海上龍子	明治一〇		自然の寂光、綠雲、青空、旅より旅へ、輝く海、佛蘭西印象記		(九ノ二三)野
吉江喬松	明治一〇		平家の人々、近世日本文學十講		(四ノ三)紐育の中央公園
高須梅溪	明治一〇		近代文學十講、文藝思潮論、象牙の塔を出でて、苦悶の象徴		(三ノ二一)蝙蝠傘
厨川白村	明治一三		窓、蝶、笛、歐洲見聞記、第一		
小山内薫	明治一四		窓、蝶、笛、歐洲見聞記、第一の世界、織匠の家		

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
正富 汪洋	一明治四		夏廂、小鼓、豊麗な花		(一ノ二六)子を持つ心
本山 荻舟	一明治四		名人崎人、近世劍客傳		(五ノ三一)崎人一茶
小川 未明	一明治五		未明感想、小品集、彼方の行く	明治十五年、外山正一等の新體詩抄出づ。福澤諭吉時事新報發刊。	(三ノ二七)郷里のお盆
齋藤 茂吉	一明治五		赤光、短歌私抄、童馬漫語		(四ノ一三)現代和歌大觀(一〇ノ九) 實朝の歌
矢田 挿雲	一明治五		江戸から東京へ		(四ノ六)富籤
野口 雨情	一明治五		かれくさ、朝花夜花、都會と田園、十五夜お月さん		(一ノ一三)童謡(虹の橋)(四ノ二二)現代詩大觀(十五夜お月さん、豊作唄)
川田 順	一明治五		陽炎、山海經		(四ノ一三)現代和歌大觀
志賀 直哉	一明治六		和解、夜の光、壽々、荒絹	明治十六年官報發刊、矢野龍溪の經國美談出づ。	(一ノ二)菜の花と小娘(二の一三)山の木と大鏝
相馬 御風	一明治六		睡蓮、御風詩集、黎明期の文學、愚庵和尚、良寛和尚詩歌集、田園春秋、砂上漫筆、一茶と良寛と芭蕉、良寛坊物語、一茶と良寛と芭蕉、良寛の思想と藝術		(四ノ一〇)芭蕉と良寛和尚(八ノ二九)生命力の直感(九ノ一)自然と人間
高村 光太郎	一明治六		道程、印象主義の思想と藝術		(七ノ八)五月の土襲
安倍 能成	一明治六		西洋近世哲學史		(九ノ一六)生命と愛
阿部 次郎	一明治六		三太郎の日記、北郊雜記、三太郎の日記第二		(一ノ一四)月見草、(三ノ一九)蚊帳
前田 夕暮	一明治六		前田夕暮集、歌話と評傳、綠草心理、短歌雜話		(四ノ一三)現代和歌大觀
荻原 井泉水	一明治七		俳句提唱、井泉水傳、山水巡禮、旅人芭蕉	明治十七年、成島柳北歿す。	(三ノ二)お通路さん、(四ノ二五)現代俳句大觀(七ノ二四)正風興隆、(八ノ二二)女流俳人

作者	生年	歿年	作 品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
竹久 夢二	一明治七		夢二畫集、どんたく		(二ノ二二)雪よ小雪よ
北原 白秋	一明治八		白秋詩集、白秋小品、雀の生活、季節の窓、水墨集	明治十八年、尾崎紅葉等硯友社を起す。坪内逍遙の小説神髓出づ。ローマ字會起る。	(一ノ一)お祭、(三ノ三)雀の生活、(三ノ七)現代詩大觀(南の風の)、(四ノ一三)現代和歌大觀、(七ノ三三)らる
若山 牧水	一明治八		くわ土、牧水歌話、比叡と熊野、花さける曠野		(一ノ七)勝つも負けるも、(四ノ一三)現代和歌大觀
土岐 善麿	一明治八		土岐哀果集、作者別萬葉全集		(一〇ノ二〇)藝術
武者小路 實篤	一明治八		花咲翁、楠木正成、幸福者、耶蘇、新しき村の生活		(四ノ一五)西湖の月
黒田 鵬心	一明治八		趣味叢書、大日本美術史		(九ノ一四)文藝的教養、(一〇ノ二六)もの、あはれ
谷崎 潤一郎	一明治九		人魚の嘆き、異端者の悲しみ、新選谷崎潤一郎集	明治十九年、末廣鐵腸の「雪中梅」出づ。山田美妙齋言文一致を唱ふ。	(二ノ二七)ふるさと、(六ノ一八)現代和歌大觀
本間 久雄	一明治九		藝術の起源、文學概論		(三ノ四)和田湖、
石川 啄木	一明治九		啄木全集、啄木歌集		(三ノ二〇)七夕祭、(七ノ一六)詩の心
野上 彌生子	一明治九		傳説の時代、新しき生命		(四ノ一三)現代和歌大觀
吉田 絃二郎	一明治九		生くる日の限り、小鳥の来る日、草光る、静かなる土	明治二十年、二葉亭の浮雲、美妙齋・紅葉の新體詩選、柴四朗の佳人の奇遇出づ。	(二ノ五)誓札、(三ノ二五)現代女流歌人の和歌、(八ノ二四)多摩御陵参拜の記
木下 利玄	一明治九		銀、紅玉、一路、		(四ノ一六)錢
九條 武子	一明治〇		無憂華		(七ノ三三)富士を觀る
長田 幹彦	一明治〇		祇園夜話、霧		
長與 善郎	一明治一		彼等の運命、生活の花、項羽と劉邦、頼朝	明治二十一年、東京朝日新聞、大阪毎日新聞發刊。	

作者	生年	歿年	作品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
川路柳虹	明治一		路傍の花、かなたの空、現代詩歌、現代藝術講話、作詩の新研究		(三ノ一七)現代詩大観(希望)、(八ノ一一)珈琲茶碗
室生犀星	明治一		抒情小曲集、田舎の花、美しき氷河、赤馬燈		(四ノ七)現代詩大観(鮎のかげ)
千家元麿	明治一		虹、炎天、夜の河、青い枝、冬晴れ		
里見弴	明治一		桐畑、文藝管見、自醉亭漫記、瑠璃子の鞭		
若山喜志子	明治一				(三ノ二五)現代女流歌人の和歌
柳澤健	明治二		柳澤健詩集、現代佛蘭西詩集		(四ノ七)現代詩大観(テニス)、(七ノ二五)伊太利の海
菊池寛	明治二		菊池寛全集	明治二十二年、露伴の露園々、風流附、森鷗外のしからみ草紙、おもかげ、大和田建樹の「いさり火」出づ。新聞日本發刊。	(四ノ一九)、(二〇)精進勇猛、(九ノ二五)形
尾山篤二郎	明治二		歌ばかうして作る		(四ノ一三)現代和歌大観
江馬修	明治二		受難者、夏樹、心の窓		(四ノ四)飛驒の高山
三木露風	明治二		象徴詩集、青き樹かげ、美學草案		(四ノ二二)現代詩大観(紅椿)、(一〇ノ二二)現身
中村憲吉	明治二		馬鈴薯の花、しがらみ		(四ノ一三)現代和歌大観
和辻哲郎	明治二		偶像再興、古寺巡禮		(八ノ一)魂の微笑
富田碎花	明治三		末日頌、地の子、草の薨	明治二十三年、森鷗外の「舞姫」	(三ノ六)現代詩大観(朝の歌)
豊島與志雄	明治三		生あらば、蘇生、微笑、彗星の話	三上・高津の日本文學史出づ。日本文學全書發刊。	(一〇ノ一)秋の本質

作者	生年	歿年	作品	文學史上の事項	本書に採用せる教材
茅野雅子	明治三		金沙集		(三ノ二五)現代女流歌人の和歌
白鳥省吾	明治三		大地の愛、樂園の途上、詩に徹する道、ホイットマン詩集		(三ノ六)現代詩大観(鮎)
久米正雄	明治四		牧場の兄弟、鶯草、不死鳥		(八ノ二二)一茶の童話味
倉田百三	明治四		出家とその弟子、歌はぬ人、俊寛、布施太子の入山	明治二十四年、中村正直歿す。巖谷小波が、これ九少年文學第一として出版。逍遙等早稻田文學發刊。	(一ノ二二)飛行機、(四ノ一一)、(一一)棧道
濱田廣介	明治六	昭和五年	ひろすけ童話讀本、小鳥と花と	論規の類書屋併話逍遙の史劇、日局出づ。河竹默阿彌歿す。	(三ノ三)童話(四十雀)、(八ノ三)地蔵様と機おり蟲
生田春月	明治五		靈魂の秋、眞實に生きる惱	明治二十五年、露伴の五重塔、鳴外の水沫集即興詩人出づ。	(二ノ六)花火
芥川龍之介	明治五		手巾、羅生門、傀儡師、夜來の花、黄雀風	子規の水沫集即興詩人出づ。動起る。黒岩涙香萬朝報を始む。透谷の「秋窓雜記」出づ。	(一ノ六)蜘蛛の糸、(三ノ二)太郎、(七ノ七)蛙、(七ノ一九)雌蜘蛛
佐藤春夫	明治五		南方紀行、田圃の喜、佐藤春夫選集、藝術、家の喜		(三ノ一)私の父の家の話
西條八十	明治五		赤き獵衣、白孔雀、砂金、現代英詩講話		(一ノ五)自然の玩具、(三ノ一七)童話(鉛筆の心)、(三ノ一七)現代詩大観(夕顔)、(四ノ一)母と盧
百田宗治	明治六		百田宗治詩集、ぬかるみの街道、新月		(八ノ二)月
西川勉	明治七		純正童話講話、母を尋れて三千里		(八ノ二八)部屋
林信一	明治七		栗の花、林信一詩集	逍遙の桐一葉、透谷集出づ。雜誌「文學界」創刊。(明治二十八年)	(二ノ三)童話(笹舟)
吉屋信子	明治九		花物語、地の果まで、海の極みまで	一葉の濁江、たけくらべ、十三夜、外山正一の散文詩可兒大尉出づ。帝國文學・太陽・文藝俱樂部・文庫發刊。紅葉の多情多恨、逍遙の牧の方鐵幹の東西南北出づ。雜誌めざまし草。	(二ノ二)羽根と萬歳、(三ノ一五)滅びぬもの

文學史上の事項

(明)紅葉の金色夜叉、藤村の若菜集、治獨歩の「火」出づ。葉全集、若松賤子の「鳥城」出づ。
 (三)俳句雜誌「ホトトギス」、子規の「短歌新論」、日本俳句集、新俳句、竹柏園短歌雜誌「心の花」、藤村の「夏草」出づ。
 (三)蘆花の「不如歸」、晚翠の「天地有情」、櫻子の時代精神論、泣菫詩集、暮笛集。
 (三)和歌雜誌「明星」、藤村の「落梅集」、蘆花の「自然と人生」、芳賀矢一の國文學史十講出づ。
 (三)蘆花の思出の記、獨歩の武藏野、藤村の「落梅集」、晚翠の「曉鐘」、四田敏の「みづくし」、品子の「亂れ年髪」、櫻子の「美的生活論」出づ。詩歌全盛。
 (三)透谷全集、藤村詩集、露伴叢書年出づ。
 (三)鳴外脚本玉匣兩浦島、有明詩集、獨絃哀歌、子規等作生文集出づ。
 (三)紅葉全集、櫻子全集、逍遙の「七樂劇論」、新曲浦島、雜誌「新潮」里及び秋之家遺稿、子規歌集竹の年出づ。
 (三)漱石の倫敦塔、吾輩は猫である、文學全史、(安朝篇)、獨歩集。

文學史上の事項

(元)有明詩集、春鳥集、啄木詩集あ年こがれ出づ。
 (三)逍遙の文藝協會設立。日本エッセイストの文藝協會。藤村の「草枕」、九岩城準太郎の明治文學史、藤村の「天うつつ浪」。文章世界發刊。
 (三)花袋の蒲團、四迷の平凡、漱石の「虞美人草」出づ。自然主義勃興す。
 (四)虚子の鶏頭、俳諧師、雜誌「アウラギ」有明集、漱石の「文鳥」出づ。泡鳴詩集「闇の盃」出づ。
 (四)眉山全集、抱月の近代文藝の研究出づ。宙外、鏡花の文藝革新等口語詩の說を唱ふ。漱石の文學評論、碧梧桐の新傾向論及び「日本俳句抄」、白萩の「宗門」、子規句集、露風詩集、廢園出づ。漢文大系出版。
 (四)文藝委員會設置、啄木の「握の砂」、雜誌「白樺」、長塚節の「土田文學全集」、獨歩全集出づ。三田文學發刊。
 (四)品子の「春泥集」出づ。藤村の「千曲川」のスケッチ、井泉水層雲發刊。文藝委員會成る。

文學史上の事項

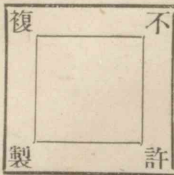
(五)白村の近代文學十講出づ。露伴の努力論、國文叢書、文藝叢書發刊。
 (五)みづの「たはごこ」、鳴外譯「フア」出づ。茂吉歌集赤光、雨江全集出づ。
 (五)露伴の洗心録、俳句集、自然の「屏」出づ。
 (四)龍之介の羅生門、子規遺稿出づ。年村吉藏作新社會劇、金子薰開集出づ。
 (五)新理想主義文學起る。藤村の「幼きものに」、花袋全集、藤村の「讀本」出づ。
 (六)龍之介の羅生門、百三の出家、年村の「春夫の田園の憂鬱」、長塚節歌集、高安月郊著作集出づ。
 (七)鳴外の「高瀬舟」、寛の忠新行狀記、漱石全集、龍之介の「蜘蛛の糸」、逍遙の「義時の最期」出づ。
 (八)武郎の「惜しみなく愛は春」、寛の「恩讐の彼方に」、雜誌「人問」、抱月全集、啄木全集、詩話會編、日本詩集、富田碎花詩集、草子短歌全集、雜誌改造、解放、現代等發刊。
 (九)宗教文學起る。左千夫全集、柳村詩集、牧羊神、武郎譯「ホイッマン」詩集、白萩の雀の生活出づ。

文學史上の事項

(三)健次郎の「日本から日本へ」、寛の「俊寛」、龍之介の「夜來の花」出づ。
 (一)江原小彌太「新約」「舊約」、西洋文學翻譯全集多く出づ。逍遙作「我が家へ」エッセイ出づ。藤村全集、藤村飯倉たより、逍遙の「家庭用兒童劇」、短詩、童話連りに出づ。
 (一)鳴外全集、藤村の「なまなまもの」出づ。花袋の「近代の小説」出づ。
 (三)子規全集出づ。
 (一)藤村の「春を待ちつゝ」、健次郎の「富士」、泣菫詩集、日本文學集出づ。近代文藝讀本、日本童話集出づ。
 (三)藤村の「嵐」、現代小説全集、日本名著全集、文藝鑑賞讀本出づ。
 (二)昭和明治大正文學全集、國歌大系、和近世界文學全集、世界戯曲全集、年日本兒童文學、芥川龍之介全集出づ。
 (三)帝國文庫再刊、上田敏全集、蘆花全集、菊池寛全集。

日二十二月二年 昭
文 部 省 檢 定 濟
 用 科 語 國 校 學 女 等 高

昭和三年九月二十五日印刷
 昭和三年九月三十日發行
 昭和四年二月十四日訂正再版印刷
 昭和四年二月十八日訂正再版發行



發行所

永澤金港堂

電話 上二三四六番
 振替口座大阪二一三五番

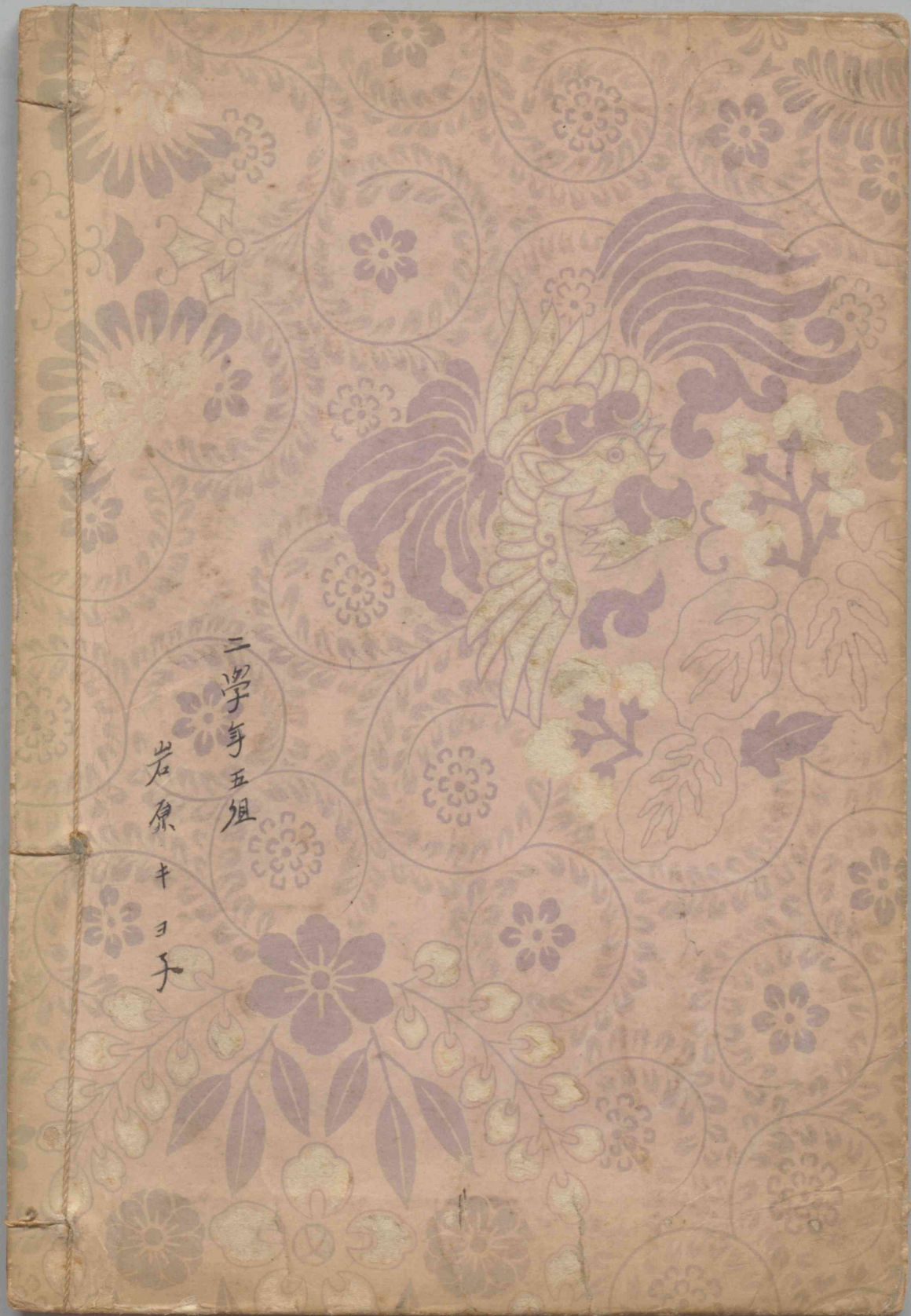
京都市上京區河原町通丸太町下ル

著 者 新 村 出

印 刷 者 兼 永 澤 信 之 助

印 刷 所 京 都 市 下 京 區 西 洞 院 七 條 南 入 外 出 版 印 刷 株 式 會 社

新撰	巻数	昭和六年度	昭和七年度
女子國文	第一	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第二	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第三	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第四	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第五	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第六	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第七	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第八	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第九	金七拾壹錢	金七拾壹錢
	第十	金七拾壹錢	金七拾壹錢



二學身五組

岩原キヨ子